特240
402

古谷栄一著

20 SEN

0007225000

0007225-000

特２４０－４０２

外務省改革論

古谷栄一・著

時局評論社

昭和１３

ABH

この著作物は、著作権者不明のため、著
第６７条の規定に基づき、平成１２年３
付けで文化庁長官の裁定を受け使用する

特 24
402

外務省改革論

谷榮一著

20 SEN

時局評論社版

232
特240
402

古谷榮一著

外務省改革論

時局評論社版

昭和十三年十四日 購入

自序

外務省の改革は輿論の力と外務省内青年層の自覺とが相俟たなくては容易に實現しないだらう。由來外務首腦が親英派の一牙城を作つて、國民とは丸で駈け離れた同床異夢に耽つてゐる事が外交二元の根本原因であるが、彼等が此の自己陶醉の溫床から驅逐される日こそは、非常時日本が本當に獅子の如く健全に立上る日であらう。

本來、彼等外交官は日本の天業恢弘の國運に對する信仰を缺き、從つて日本の大陸發展の大使命大運命を信じ得ない憐れむ可き精神薄弱者である。かくて現狀維持英米追隨をもつて只管その信條と爲しつゝあつた彼等には到底今後の外交を負擔し拾收する實力がないのである。卽ち彼れ等を霞ヶ關から驅逐しなくては到底外交の一元化は實現しないのである。彼れ等がその舊來の怠床惰榻から親英親蔣の殘夢を擔いで完全に轉落し去る時に吾が外交の日本化は實現するのである。

勿論、非常時日本に於いて、かくの如く日本の外交當局と其の一派を攻擊するの不利益は意識せざるを得ない。併し又、外務省の改革は輿論の力を借らなくては到底なし得るものではない。特に吾等は輿論が省内部の自覺と結束とを喚起し、孤立健全分子を聲援する事を必要とするのである。

更に親英派の排斥に到つては眞に輿論の迫力壓力によらずんば、如何ともなし得ざる實狀にある。勿論彼れ等は政黨の如き勢力なものではない。從つて、言論の力によるなら、無雜作に壓到し得るのである。然も此の非常時國運の打開にはどうあつても、彼れ等の暗躍策動を恣にせしむる事を許さぬものがある。吾が日本はかくの如きハンディキャップを背負つては、到底此の非常時國難を突破出來るものではないのである。又日本は此の現狀維持派の清掃を行つて後に、吾が盟邦と眞に握手するに非ずんば眞正なる三國同盟の實現は困難なのである。已でに日本の國策は英露の打倒にある。此の事昭々乎として明らかである。沒落英國に迎合せむとするが如きものは凡べて皆國策に逆行するの徒である。然らば此の大國策に矛盾するものは凡べて排除して日本の大運命を開展せねばならぬのである。誠に眞正なる擧國一致國家總動員は勇敢に相剋不和の眞原因を壓伏せずんば得られないのである。

即ち敢えて一冊を發表する所以である。

著者

昭和十三年五月二十二日

付記

本書を將に印刷に付せむとせる時、突如軍人外相は實現した。之れ予が過般主張せる處にして、又本書の重要なる內容である。即ち本書の目的の一端は已でに實現せるものと云ふ可く、從つて本書の批難し、攻擊せる處、凡べて皆、劃期的軍人外相實現以前の外務省にある。偏へに讀者の誤解せられざらむ事を祈る。

外務省改革論

目次

(1) 問題の要點……（一）
(2) 外交官教育の大改革を要す……（二）
(3) 外務省の親英主義……（四）
(4) 親蔣派……（一三）
(5) 川越大使行衛不明事件……（一八）
(6) 冀東政府解消論と外務省の責任……（二三）
(7) 通州虐殺事件と外務省の責任……（二五）
(8) 『九ヶ國條約』廢棄を嫌ふ外務省……（二六）
(9) 國民政府助命主義は賣國思想也……（三〇）
(10) 國民は警戒せよ……（三三）

(11) 外務省抹殺す可し……（三六）
(12) 改革の方策……（四〇）
(13) 列國の新聞、及び新聞記者を賣收する蔣政權……（四六）
(14) 日支事變は日本外交官の責任也……（四八）
(15) 戰時內閣の改造必要……（五三）

附錄

怠け外務省……（五六）

國府否認聲明の檢討

(1) 贋の否認と親蔣派の暗躍……（六四）
(2) 默殺聲明にして、否認聲明に非ず……（六六）
(3) 『對手とせず』の語義……（六八）
(4) 默殺聲明は實は『承認の繼續』を現す……（七一）
(5) 新聞の粗忽な解釋……（七三）
(6) 抗議に狼狽して再聲明を發す……（七三）
(7) 『對手とせず』の實體……（七五）
(8) 再聲明こそは國府否認聲明也……（七七）
(9) 御前會議と兩聲明の關係……（七九）
(10) 大失錯を大成功に轉ずるの活策……（八一）
(11) 領土主權を蹂躪し乍ら夫れを尊重出來るか？……（八三）
(12) 『對手とせず』は『消極斷交』の義也……（八四）
(13) 『否認以上』とは何か？……（八五）
(14) 宣戰に關する認識不足……（八七）
(15) 風見聲明と首相の宣戰聲明との矛盾……（九〇）
(16) 『對手とせず』は膺懲聲明を忘れたもの……（九一）
(17) 國家を離れて政府を對手には出來ぬ……（九三）
(18) 十八日の聲明は軟弱政府の悲鳴……（九四）

(19) 風見書記官長辭職す可し……(九八)
(20) 否認聲明は英國の新聞にも見縊られる……(一〇〇)
(21) 舊中華民國は否定せられたり矣……(一〇一)

外務省改革論

(一) 問題の要點

外務省をどうにかしなくてはならない。

そう云ふ意識は今日國内上下の痛切なる要求である。そこで先般『外務省改革案』、最近は外務省から『外政省案』なるものが出て來て、一世の注意を集めてゐる。

見來れば、此れ等の案を廻つて、内閣、軍部、外務省が三ツ巴の爭である。特に軍部と外務省との對立と云ふ觀が深い。所謂『内閣直屬論』とは、それによつて支那から外務省を逐出す事であり、外務省案は東亞局等の外局には外部のものを入れるが、舊來の權力丈けは死守或は擴大しやうと云ふ頗る蟲の好い案であるが、此の際輿論は問題の專問的なるに辟易して、極めて消極的な立場をもつて之れを見送つてゐるに過ぎない。

私も折々、外交を論じ、時に外務省の改革に對して觸れた事もあるので、輿論の一端として、私の忌憚なき意見を發表して、來らむとする軍部對外務省の論爭に對して、國民の支援すべき處を示し度いと考へるのである。今日新聞で見ると、單に機構の改革のみが論議せられて、その中に外務

省の改革は盡されてゐるかの樣に考へてゐるらしく思へるが、實は今日の問題を分析して見ると

（一）外務官吏の革新

（二）機構の改革

（三）支那の經營を外務省に委ねる事の可否

此の三點にかゝつてゐる事を考へなくてはならぬ。此の三點をハッキリ意識せずに、甲論乙駁をやつてゐては、徒らに問題が混迷する計りである。

此の内で、私が尤も重視するのは、第一であつて、之れさへ改革出來れば、第二第三の問題は發生しない筈なのである。本來外交官の性格が今日の態では、機構を幾ら改革した處で、到底駄目である。

支那から外交官を逐拂ふか、どうかは誠に重大な問題で、之れは將來の支那の經綸の内容本質から判斷す可く、更に彼れ等の日頃の成績と彼れ等の思想狀態を參考と爲す可く、本書は此れ等の點に力點を置いて述べてある。よろしく御心讀を願ひ度い。

（二）外交官教育の大改革を要す

先づ、機構改革に先つて、それよりも第一になす可き事は本當の外交官の養成、教育の改革である。之れをやらなければ前述の機構改革は無意味である。

それには一度現在の外務官吏の精神を一掃する位の覺悟でかゝらなくてはならない。今日外交官試驗に外國語第一主義を排すると云つた樣な微温的な事では迚も間に合はない。私は嘗つて、

今日の歐拜外交官は全部外務省の囑託に貶して了へ

と云ふ過激論を發表したが。それも突飛で、實行不可能ではあるが、兎に角その位の氣持でなくては、今日の外務省は改革出來ないのである。

今日の外務省が國民の信用を失つたのは、その由來は相當遠いものがある。昔の事迄云つても仕方がないが、今度の日支事變で、彼れ等は好く〳〵國民から愛想をつかされて、それが外務省の若手連の反省となつて、今日の革新運動となつたものであるが、併し、之れ等の運動家達も、眞に日本人の心から覺醒してのそれではなく、只今日の外務省が袋小路へ追ひ詰められて、二進も三進も行かなくなつた狀態を切りぬけやうとしての苦しい努力であつて、その自覺思想は結局矢張り西洋直譯の所謂『持てるもの、持たざるもの』思想から出たフアッショ思想に止まつてゐて、本當の日本主義からは相當の距離があると見られてゐる。結局本當の外務省の大自覺は國民

が彼れ等に大鉞鉄を加へるのでなくば、決して成功しない筈である。彼れ等の反省なるものは今日新閥屋の愛國的反省と同じで、非常時が弛緩すると共に、又元の軌道へ戻る底の反省である。之れではならない。それには拔本塞源的の大改造をやらなくてはならないのである。それは即ち教育の改造で、此の具體的な教育については第十二節に述べてある。

（三）外務省の親英主義

日本の外交官は不可思議な心理狀態を持つてゐる。即ち國民や軍部とは丸で駈け放れた心理狀態である。

本來、外交官の養成の仕方が不健全である。即ち彼れ等が試驗に及第すると、日本人としての碌な教育も果さぬ内に、直ぐに彼れ等を歐米にやつて了ふ。精神が堅まらず、日本人として未完成の人間の内に西洋へやられるので、例外なしに彼れ等は無批判的西洋崇拜家、所謂『白人の奴隷』になつて了ふ。そうして青年時代に仕入れた日本的教養は何處へか吹飛んで、腹の底迄、不可思議な心理狀態を持つた精神的畸形兒になつて了ふ。否、今日の日本では外交官の試驗を受ける學生の心理狀態が、已でに不健全な歪曲された心理狀態になつてゐるのである。つまり輪に輪を掛けるから彼れらの精神狀態が畸形的になると云ふのが識者間の意見である。

即ち彼れ等は日本を少しも理解しない。日本の國體を理解せず、日本の歴史と文化を知らず、國民精神を知らず。かくて軍部に反感を抱き日本的なものの一切に興味を缺く結果、祖國を憎惡し、或ひは恥づるに至る。

かくて又、東洋の同族を慢ぢ、支那を輕蔑し、殆んど、東洋に對する同感同情の心を喪失する。反對に西洋的なものには無條件で拜跪し、西洋人の與へる暗示には憐れむ可き電氣人形の如く忠實に動くし、祖國の秘密を白人の女スパイに攫はれる位の事は何とも思つてゐない。西洋人の間諜と交際しても、此方では碌なものを取らず、向ふへはいくらでも大切な秘密を取られて了ふ。日本的志操薄弱な彼れ等は精神的に白人には參つてゐるので、白人と交際するといくらでも彼れらにしてやられる。白人の前で祖國を罵倒する事によつて、自分が日本及び日本人以上たる事を證明しやうとする憐れむ可き存在である。誠に日本人の實力を白人の前で最少限度に表現し、又最少限度の對祖國的評價を白人に提供して、彼れ等の祖國輕侮を甘受する特異なる存在が日本の外交官先生達である。

本來、彼れ等が外交官たるや、概して皆、所謂『外交官生活』なる綺羅美やかなる生活を憧憬

してなるので、決して國策を背負つて大いに祖國日本の爲めに闘はう云ふが如き英雄的動機をもつてなるのではない。そう云ふものは誠に僅々微である。かくて日本の莫大なる外務豫算の多くは皆彼等の役にも立たぬ娯樂外交、耽溺外交に浪費し盡されるのである。

又彼れ等の妻女は決して英雄と匹偶せむが爲めに彼れ等と婚するに非ず。その多くは、所謂『外交官夫人』となつて、虚榮生活を滿喫せむが爲めに婚するのである。然も彼の女等の精神は、又その夫以上に非日本的である。誠に西洋崇拜、多くはアメリカ主義の固りで、日本女性の美德の如きは絶無であり、彼の女等の行爲行動を見てゐると、丸で判じ物で、亡國精神を最高度に現してゐる。日本女性の最惡缺陥を暴露してゐる。その素行によつて夫を絶望させて、外交官生活を魂つて、左翼の闘士たらしめた有名なる某夫人の如きは典型的な一人に過ぎない。

處が外交官先生達は『例外なし』と云ひたい程に女性崇拜家である。此の種の惡女性の崇拜家である。或はそれでたくでは此の特殊部落民として立つて行けないのである。何となれば日本の外交官として榮達するには『美しいやり手の妻女と金がなくては駄目だ。』と云はれる。

之れによつて見ても、如何に日本の外交官達が、不見識な存在であり、彼れ等の妻女が、外交官生活に深い關係を持つてゐるかゞ判るのである。之れは悲しむ可き不都合であるが、事實であるらしい。

斯う云ふ惡傾向の起つたのは、日本の外交が西洋の女尊男卑の風潮に迎合してゐるからであるが、悲しい哉、斯う云ふ制度習慣によつて、各國の外交は害を受ければとて、益を受ける事は少いのである。誠に女尊男卑主義の外交は各自國に貢獻するよりは、寧ろ害毒を與へてゐる。

必ずしも日本に限つた事ではないが、小説や實話物なぞ見ると、一般に、外交官夫人は多辯で彼れ等の口から先方の男女に祖國の機密を洩らす事が稀にあると云はれる。反對に彼等が奪ひ取る事は洩らすものの十分の一か二十分の一に過ぎないらしい。彼れ等の多くは間諜の醜弄する處となつて祖國に多少共禍害となつてゐると云はれる。之れは萬更一笑に付せぬ噂である。

然も外交官夫人として、國際場裡に於いて、天晴れな活動(?)をしやうと云ふ虚榮と野心の人一倍猛烈な女になると夫の機密に參加する事を希望して止まない。そのフエミニズムに依つて益々軟化された彼等の夫は、遂々國家の秘密を妻女に咄して了ふ。そうして、長髪粉面の自稱外交官達が、屢々之れを自分達の拙劣な佛蘭西語による諜々喃々の玩具として了ふので、列國は、他國の秘密を盗む爲め、外交官夫婦を籠絡する事に、懸命になつて、美男美女を盛んに驅使してゐ

る事、又猶太財閥の翻弄の好餌も彼等夫妻であると云はれるが、勿論これ等には頗る小說的な誇張はあるとしても、萬更根無し草の話ではない。女尊男卑の外交を改革するには輕視出來ない物語である。

更に外交官の試驗たるや、可成り情實纒綿たるもので、富豪名門の子弟は大手を振つて入れるが、何等の因緣なき町人農夫の子弟は如何に秀才であつても、容易に外交官たるを得なかつた時代があつた相である。然し『現在ではそうでない』と外務省では云つてゐる。

面白い逸話がある。死んだ某大使の令嬢だつた某夫人がフランス語の敎授を池上邊の西郊でやつてゐると、そこへ外務省の試驗を受ける爲めに色々の靑年が入學して來る。處が彼れ等の內で富豪名門に關係のあるものは凡才でも外交官の試驗に及第し、然らざるもの、單に日本橋の魚屋だか乾物屋だかの息子と云ふのは秀才であつたが、不合格であつたので、彼の女はカン〳〵に怒つて外務省に捻込んだ事がある。それを私は彼の女の所へ出入してゐるものから聞いたのだが、眞僞は保證の限りでない。兎に角、之れは僅に一例で、此の場合、日本橋の魚屋の息子の方に不合格になる理由があつたとしても、外務省の採用方針が一部の人から疑はれてゐる事は事實である。だが之れは個人的に各人に當つて見ねば證明されぬ事である。

斯う云ふ頽廢的な空氣の中から生れるからこそ日本の外交官の中には外國の停車場へ電信暗號を納めた鞄を置き忘れて他國へ行つたり、御批準書を攫はれたりして、何の責任も取らず、そう云ふ人物が次官に榮轉したりする樣な事になるのである。

之れでは迚も日本に本當の外交官を作り上げる事は出來ない。今日の風雲龍虎を呼ぶ大外交場裡に角逐出來る英雄を作り出せるものではないのである。

筆者はかつて、日本の外交官の性格を叩き直す爲めに、彼れ等に、武道を必習せしむ可き旨を說いたが、近來外務省內での劒道が行はれる樣になつたとは云へ、名を連ねてゐるもの十人に一人の有樣である。その特志家も屬や雇のみで、『外交官は武道がお嫌』と云ふ文句さへある。然も廣田杉村兩氏の如く、柔道の選手であり乍ら、あの特殊部落へ入ると、あの海月の樣な軟化狀態なのだから、兎に角武道を全體に强制しなくては、外務省の空氣を改新する事は不可能である。

かう云ふ一團の人々によつて占領せられたる日本の外務省は、當然その精神的生活に於いて、軍部や國民と沒交涉にならざるを得ないのである。かくて外務省の一劃に『霞ケ關』なる一孤島を作るのである。

誠に此の離れ小島の中から、國民精神や生活とは全く沒交涉な日本の不見識外交が生れ出でる

のである。彼れ等の偏傾した西洋奴隷の精神から生れた不可思議な歐拜的な、白人中心、白人模倣、白人盲從、白人直譯、何等日本性なく、獨創性なく、自主性のない追隨外交、幇間外交、奴隷外交なるものが生れるのである。それの頂點にあるものが、例の不見識極まる幣原外交である。著にも棒にも掛からぬ幣原外交である。今日彼れは完全に吹飛ばされて、吉田外交になつてゐるが、どちらも五十歩百歩の代物である。即ち、武者小路、白鳥、谷、大鷹等二三の例外を除いて、外務省は吉田駐英大使の勢力圏に統一されたと云はれてゐる。つまり彼れ等白人崇拜家等は吉田閥の親英外交によつて統一されて、依然幣原外交の軌道内にあると見做す事が出來るのである。そして此の親英外交の牙城は幣原氏の聯盟至上主義の原理によつて導かれてゐると云はれてゐる廣田氏は幣原外交の顧問であり、堀内外務次官はその番頭である。堀内次官の如きデモクラシイと西洋主義、チヱントルマン主義の信仰者、御批準書を紛失して碌な責任を負はなかつた人物が羽振を利かすのも皆其の情實である。だが彼等は其の土臺の着々たる崩壞を知らぬのである。

日本國民の全意志とは凡そ矛盾した彼れ等の親英主義は、實にかう云ふ温床から生れ出でるので、英國と日本とを握手させて、日本を英國の盟邦、結局、ジョンブルの奴隷としやうと云ふのが、彼れ等の主目的である。日支事變前に日英同盟的のものを企圖して防共協定の向ふを行かうとしたと云ふ風說すらあるのである。

が、之れは日本と英國との世界に於ける地位を理解せざる浚分曉漢の空想で、彼れ等が自己の嗜好と興味によつて、國民の全意志に逆行せむとするが如きは滑稽の沙汰である。

彼れ等が何等抱負經綸があつて然るのでないのは、彼れ等は彼れ等の親英主義に於いて、一言隻句と雖へども侃々諤々の言說を公表して國民や軍部の大陸發展主義、或はその親獨親伊主義と戰ふ丈けの男らしさはなく、只自己のもてる隱れたる力を利用し、隱密なる力を惡用して、此の滔々たる大國是を妨害する覆面の魔手としてのみ働いてゐる事に依つて明らかである。

之れは大不可である。それが隱密的暗躍なのは偏へに親英派の主義主張が正しくない證據である。若し國家の爲めに正しいと信じたなら、彼れ等は何が故に堂々、その親英主義を提げて、國民の主張と戰はないのだ。それが出來ないのは彼れ等の親英主義が情實主義な事の證據である。今日國内に於いて、日獨伊三國同盟を妨げつゝあつたものは、偏へに彼れ等一派のみである。

彼れ等が腹に一物を藏して、日本の大國是の妨害となつてゐる有樣は、斷じてブレーキの役目ですらもなく、齒車の間に故障の石となりつつあるものである。英雄民族日本が西方の二英雄ヒツトラーやムツソリーニとしつかり握手するには、外務省と云ふ『女の手袋』の樣な存在を脱ぎ捨

てて赤裸々な國民外交によらなくてはならないのである。即ち外務省抹殺論の起る所以である。

（四）親蔣派

此の親英派と呼應するものに『親蔣派』なるものがある。或は親英派の一派にして南京に使した列國使臣の一部をかく云ふのが當れりとする。

列國の使臣や新聞雜誌記者にして南京に行つたものにして親蔣派と成り下るものが實に多いのである。蔣氏に出會つたものの多くは斷然親蔣派になる。中には宋美齡派になるものもある。かくて英國の首相は

『吾が國の駐支使臣は本國の意志に反した勝手な行動をとつて困る』

と云つてゐるが、之れは英國の使臣が皆猶太財閥や蔣氏夫妻と結托して、本國の意志に反した勝手な事をするのを批難したものである。吾が日本の駐支外交官がどの程度の親蔣派であるかは判らぬ。然し、彼れ等が中華民國再認識の運動を起した事、それに次で冀東政府解消運動を起した事、『九ケ國條約』の破棄を嫌つてゐる事、中華民國の抹殺は勿論、國府否定すら行ひ遂つた事、南京攻圍の眞最中に蔣政府擁護の聲明を發した事、軍部の切札たる國府否定をば蔣政府勸降の道具に濫用して迄勸降主義を固執して、時局解決を遷延せしめた事なぞから見て、彼れ等も亦立派な親蔣派だと云ふより外に解釋のし樣がないのである、然も彼れ等。本來、支那を碌々研究もせず、支那へ赴任するのを非常に嫌つてゐる彼れ等が、親蔣派となる一つの動機は、彼れ等の親英主義にある。勿論その外にも色々の理由があるだらうが、兎に角、親英心理から親蔣派になるのである。

彼れ等が親英派だと云ふ丈けではまだ、『賣國的』の證明にはならない。獨逸に赴任するもの皆親獨派、伊太利に赴任するもの、皆親伊派になる。漫然『親英派』と云はれる丈けでは斷じて『賣國奴』ではない。併し親英派がその原因で、親蔣派になつたとすれば、之れは賣國的心理になる危險が充分ある。何となれば親蔣派たるべき親英心理は必ず日本と對抗的立場にあるからである即ち親英派に『親蔣』なる限定が付される時に、その親英派は極めて特殊な親英派たる事を證明するからである。

處で日本の駐支外交官は多かれ少かれ親蔣派である。更に之れ等の一派が猶太族と氣脈を通ずるに至つては許す可からざる賣國奴と云ふべきである。須磨總領事や日高參事官の南京政府讃美の態度は、吾々をして不審怪訝の念に耐えざらしめたものである。之れ等の中で尤も不審至極なものは後述の川越大使の蔣介石擁護の聲明である。即ち昨年十一月二十七日發行『報知新聞』所

戟川越大使の『蔣介石を語る』に曰く

『ところが日支間の空氣がいよ／＼險惡となつた時、彼はその見透しにおいて大きな誤算を犯した。日本がこれ程までに國を擧げて腹を決めてかからうとは思はなかつたこと、及び國際關係から客觀的に見て見透しは誤つたといへる。

要するに私は前からいつてゐる如く、日本も支那を見直さねばならぬが、支那もまた成長し、伸び行く日本を再認識することが必要だ、しかし少くとも私は若し將來日本が支那と講和の折衝を始めるとすれば、その相手たり得るものは矢張り蔣介石だと思つてゐる。』

又『讀賣新聞』には左の如く出てゐる。卽ち『三ケ月振り川越大使語る』に於いて、

『問　反蔣派のクーデ！ターは考へられぬか、

答　反蔣勢力の擡頭は確かに見られるであらうし、その有力なるものとしては廣西派や共產黨一派があらう、韓復榘の態度も動搖してゐる。しかしこれによつて近く蔣政權が到壞するかどうかは疑問である。自分は以前から蔣が對支交涉の唯一の相手であると考へて居るが今もつてさう思つて居る。

（中略）

答　國民政府がわが國との交涉に出てこない以上は、我が國としては適當と認める地方的主體を相手として取きめをせざるを得ない、しかし國府が交涉を希望してくるにおいてはこれを拒むものでない。

問　交涉開始されるとせば如何なる態度でのぞむか。

答　それについて國內一部にも退讓論を唱へるものあり日本は支那にして覺醒せば考へ得る一切の讓步をなして支那の反省を待たんとの意見であり、自分もこれが理想であるとは思ふが今日の支那の實情に卽さない。支那の排日抗日がそれ程一朝にして克服し得るものとは思へぬし、一步を謬まれば一層排日侮日を生むこととともなる。』

之れは南京攻略中に於ける彼れの談である。第一引用の終の一句、第二引用の第一の圈點個所なぞは實に驚く可き文句ではないか。之れは多くの人士の間に深刻な物議を釀したもので、私は之れを

『國賊聲明』

と斷言するに憚らないのである。皇軍の將士が尊い碧血を流してゐるのは一體何の爲めか？　皆蔣政府を打倒せむとするのにある。然も南京攻略戰の眞最中に、日本の大使が蔣政府擁護を中外に聲明するとは、何と云ふ氣狂染みた行爲だらう。私は彼等の日頃の行動と照し合して、

彼れは帝國の使臣であり乍ら、敵を擁護せむとする不敵な行動を爲す者と云はねばならぬ。軍が一日も早く蔣政權をその位置から押落そうとしてゐる眞最中に吾が外交は之を不自然不可思議な態度で支持してゐる。此の川越聲明が、云損じや書き損じでない事は、彼れ等外交官が機會ある毎に、蔣政府と中華民國を推挽擁護しやうとして來たのでも判るのである。

之れをしも軍部及び國民と外交との矛盾と云はずして何だらうか？

之れでは支那の反蔣主義者は皆殁落し、蔣政府は益々元氣付いて抗戰を繼續する事は明白ではないか？　即ち蔣政府軍の打つ銃丸の一部は川越聲明に元氣付けられて打つてゐると見做す可く『春秋』の筆法をもつてすれば、『皇軍の戰死者の一部は此の聲明の御蔭である』と云ふも不可なしと云へやう。若し此の聲明が外務省をカン〳〵に怒らせでもすれば、確かに外務省は之れに『グル』ではない事になる。所が之の爲めに、川越大使は召還もされず、責任も負はず、何等批難され詰責されなかつた事を見ても此の聲明には吾が外務省が贊成であつたのは明白で、川越氏とて氣狂でない以上、據處がなくて、あんな大それた聲明を發するものではないのである。新聞の報ずる處によると、今日でも(四月)上海市民は今にも講和になつて、蔣介石氏が南京に歸つて來ると信じてゐるものがあると云ふ。

一體之の樣な流言の根據は何處から來るか？　一部は『此の川越聲明が重大原因也』と吾々は信じてゐる。日本には此の聲明を裏付ける親英親蔣派なるものが存在して、意識的無意識的に英國政府や猶太財閥と握手して、何とかして蔣政府を助けやうとしてゐるものがあるのである。之れは國民よりも、第三國人や、蔣政府が好く知つてゐるのである。それ故彼れ等支那民衆は時あつて、蔣政府は又南京に歸ると思つてゐる。そう云ふ工合だから、彼等抗日政府は中々日本軍によつて潰されないのである。それ故英國の新任大使は先般、決然、漢口に赴いて、蔣政府に國書を捧呈して、援蔣意志を明示したのである。

又そう云う情勢であるから手近の上海に有力なる新政府が出來なかつたのである。本當に有力な人物が乘出して來なかつたのである。それ故又、維新政府がわざ〳〵極北の微力辟在政府に合併しなくてはならぬ樣な羽目に陷つたのである。若し有力な大政府が出來れば、あんな事にはならず却つて北支政府に對して、

『汝等こそ南下して當政府の大傘下に來れ』

と云ふに相違ないのである。

兎に角、日本の軍部は中支に有力新政府を造らうとして焦燥してゐるが、困難の原因は途方も

ない處にあるのである。獨逸に面白い御伽話がある。何とか云ふ武士が、深田の中に陷つた一疋の馬を引ッ張り出そうとして、一生懸命で鬚や耳を引ッ張つたが、どうしても馬が上つて來ない。氣が付いて足許を見たら、自分はその馬の背中の上に騎つて居たので、

『それなら尻をヒッパたくだつた』

と歎息したと云ふ話がある。日本の武士も何處かの尻をヒッパたくのを忘れてはゐないか。

（五）川越大使行衛不明事件

此の戸惑ひ聲明に先つて川越大使は『行衛不明事件』なるスキャンダルを引起してゐる。帝國の代表使臣が行衛不明になるとは、如何にも珍事件であるが、今日でも眞相を書いたものが見當らぬ處の奇妙な事件である。當時、廣田外務大臣は、

『早く任地へ行け』

と矢の様に催促したが、川越氏は密かに北支で大運動をやつてゐて、どうしても動かなかつたのである。外相は議會では

『早く任地へ歸れと命じても、どう云ふわけか知らぬが、動かなかつたのであります』

と空とぼけた答辯をしてゐるが、皆馴れ合なのである。『川越心臓』と號して、川越氏が大臣の命をも肯かず、北支に頑張つてゐたのを剛腹なりとして驚くものがあるが、川越氏は自分が働せらるる筈がないから動かなかつたのである。何となれば親英派の巨頭連が川越氏の行動を支援してゐるからである。

それなら川越氏は何をしてゐたか？　彼れは北支で事件を揉み潰して中華民國を救出す爲めに、大童の活動をやつてゐたのである。出先軍部を抑へる爲めに盛んに蠢動妄動をやつてゐたのである。事絶望と見るや、漸く、上海へ歸つたものの、手も足も出ずに引籠つて三ケ月の間面會謝絶をして何等軍部と熱心な協同行動をしなかつたと云はれて居るが、中々苦悶したらしく流石に彼れも憂れたと云はれる。遂に蔣政府に對して大した心中立ても出來なかつたが、その時閑居から起ち上るや、只一句あんな大それた聲明を發したのである。

だが、軍部、特に出先軍部から睨まれて縮み上つて、十日もすると、

『蔣政府なぞ相手にするな』

と云ふ再聲明を發して、天下の笑を買つてゐる。川越大使のこの怪行動は故らに曖昧の内に葬られたけれど、それでも議會の問題になつたが、怠惰な議員の質問なぞ問題にもならず、辛うじて

外相をして、

『國民の間にかくの如き不信用なる外交官を生じたのは誠に遺憾であります』

と云つて、暗に川越氏の失態を肯定せしめたが、底の底迄同じ穴の貉である外相はそれだからとて、川越氏の責任を糺彈するの擧にも出でず、再び支那に赴任させても好い樣な氣色を見せてゐたのである。同じ穴の貉は實に飛んでもない處迄蟠居してゐたのである。外務省の青年層に川越排斥の聲の微弱なのを見ても、如何に彼れ等が巨大な親英閥の前に拜跽してゐるかゞ判るので、所詮彼れ等青年層も賴むに足らぬのではなからうか？之れでは國民の間に『不信用なる外交官』の語は終の三字を『外務省』の三字に入れ替へざるを得ないのではないか。

川越大使が客易に南京に赴任せずに、北支に滯留して盛んに運動したのは、必ずや彼れ等の立場と日本帝國の國是との不一致が原因してゐると見るは辟目であらうか？

そうして又、蔣政府がかくも去就を誤つたのは實は駐日支那大使の報道を無視酷遇する程に川越大使一派、一口に日本の駐支外交官一派の當時の親蔣的な行動によつて誤られたと見るのが尤も正しいと考へ度いのである。彼れ等要人は常に之れ等日本の外交官と會談し、歡談して彼れ等から日本の眞意を打診したのである。日本の變態心理的外交官を打診する事によつて、日本

を診察しやうとした處に彼れ等抗日派の大失敗がある。

若し此の時彼れ等外交官一派が、蔣介石等に意識的背負投げを食はしたと萬々假定すれば、何と云ふ鮮かな外交官達だらう。彼れ等は支那の外交官以上の素晴らしい外交官だ。少くも敵に一杯食はせる點では、卓越したる小手先外交官だ。

だが、それなら、彼れ等の行動、態度、聲明がいつでも吾が國民の意志と正反對なのを何と說明するか？　日本の國策と外交の妨害を爲しつつあるのを何と說明するか？　吾々國民の總意、卽ち『國民政府打倒』、『蔣政府打倒』と云ふ大意志と大矛盾するのをどうする？

之れは明らかに一杯食はされたのは蔣政權のみではなくて、彼れ等の道連れたる日本の外交官一派も左樣ではなからうか。いや誰れも日本の外交官に一杯食はしたものは日本側にはゐない。彼れ等が勝手に一杯も二杯も食つたのだ？

そうだらう。日本人であり乍ら、日本國民の底力を認識する力を缺いて居るから、一杯も二杯も食ふのである。又そういふ日本の外交官であるから、支那の實力認識に於いても一杯食ふのである。川越君は

『蔣介石は日本が斯くも國を擧げて立上らうとは思はなかつた』

と云つてゐるが、之れは『問ふに落ちず、云ふに落ちる』で、日本の親蔣的外交官からして、そう思はなかつたからこそ、蔣政府がそう思はなかつたのである。若し、彼れ等にしてそう思つたなら、彼れ等は蔣政府をして、尙々有力なる反省を爲さしめ得た筈である。又支那の親日平和主義者をして、尙々有力なる活動を爲さしめ得た筈である。

誠に玆にも外務省の大なる責任があるのである。

（六）翼東政府解消論と外務省の責任

日支事變の起る一年前、『翼東政府解消論』なるものが、何處からともなく起つて來たものである。

折角、軍部が苦心して築き上げた翼東政府を『解消せよ』と云ふのである。日本國内に於いて之れを支持したものは、資本家と自由主義的新聞雜誌である。自由主義者の贊成するのは勿論だが、當時一部資本家も亦、反軍精神からして陸軍の大陸發展を好まずして、此の運動に一役買つて出たのである。

之れに反して、反對運動は誠に微々たるもので、著者の知れる限りでは、日本主義陣營に於いて微弱な反對があつたに過ぎない。只特筆すべきは岩田富美夫氏がその『やまと新聞』を提げて挺身して奮鬪してゐたのに過ぎず、實に大厦の正に倒れんとするのを一木をもつて支へつつあるかの如き慨を與へたものである。

軍部はと云ふと、切齒扼腕して口惜しがつてゐたが、時正に二・二六事件の直後をうけて、本當の謹慎中であつた上、政黨やその他のものの反軍運動に圍まれて、意氣上らざる事夥しく、何等の策動すらもする事なく、危い哉、翼東政府解消は誠に時の問題と見ゆるに至つたのである。

後になつて判つたが、あの運動——たしかにあの組織的に起つて來たあの運動は外務省が手を廻して起したのだと見られてゐる。その主動者が外務省であるとは今日一般に認められる處であるが、あの時丈けは『無能外務省も中々隅に置けない』と人々をして感心さしたが、併し、ああ云ふ性質の問題を、ああやつて、民間の輿論を動員させ使嗾してやると云ふ事、特に一つの運動として行ふと云ふ事が不當なのは云ふ迄もないが、尤も不當な點は、此の大運動は、英國と猶太財閥と蔣政府と此の三つのものと結托して起された運動であると云ふ點である。吾々が

『外務省敎す可からず』

と叫ぶ所以のものは實に此の運動の賣國性にあるのである。

本來冀東政府に對し、尤も強い脅威を感じてゐるものに英國がある。と云ふわけは、冀東政府の海關が國民政府の海關に甚大なる損害を與へてゐる。それ故冀東政府の存在によつて大損害を受くる猶太財閥と國民政府と英國とが、我が駐支外交官と四ツ巴の相談によつて捲き起されたものが、卽ち冀東政府解消運動なるものである。當時、桑鳴亞細亞局長の渡支は冀東の密輸政策を押へむが爲めと云はれてゐる。然も我が外務省は公然此の眞相を割つて政府や國民に訴へるのではなくて、只々『日支親善の爲めには冀東解消を必要とする』と云ふ建前で、政府及び國民に贊成を求めたのである。

彼れ等は決して冀東解消によつて日支親善が恢復されるなどとは思つてゐなかつたのである。又之れには英國の保證以外に何等の保證も要求されなかつたらしいのである。只彼れ等の親英親蔣心理から、あんな馬鹿げた運動を起したのである。

彼れ等の精神や志向が日本の大陸國策と背馳する事は之れでも好く判る。

表面に現れた處は之れ丈けであるが、彼れ等の中華民國再認識論、其の他色々の親蔣援蔣運動と綜合する時、此の冀東解消運動は筆者に甚大なる外務省不信用の氣持を起させるのである。

（七）通州虐殺事件と外務省の責任

中野正剛氏が面白い事實を曝露してゐる。卽ちあの時の解消運動は正を說いて單刀直入堂々と外務省の責任に於いて事を遂げると云ふのではなく、輿論を動かして、その力でやらうとするのだから、容易な事では實現しない。

そうなると、地元の冀東政府では氣が氣でない。親日派の冀東官吏は滿洲國や日本へ亡命の用意をするなぞ、全く浮足立つて了つた。保安隊の連中も御多分に洩れないが、彼れ等の中には滿洲へ行くのを欲しないものもある。それなら

『中國へ歸るには手土產が要る！』

寄り〳〵皆で相談してゐたものである。之れを察知した殷長官は中野氏の處へ手紙をよこして

『早く日本政府に冀東は解消するか否かを決定さしてくれ。それでないと、人心が動搖して困る。愚圖々々してゐると、今に自分には治安の維持が出來なくなるかも知れぬから』

と云つてゐる。

果せる哉、その直後に日支事變が勃發すると共に、此の冀東事件の時に動搖した保安隊が立つ

て日本人の大量虐殺をやつたのである。彼れ等は皆解消事件の際の動搖で脛に疵をもつてゐる連中である。そこでいつ迄も忠實に親日家として針の莚に坐つて居られなかつたので、思ひ切つてあの暴擧に出たので、必しも『支那の大勝利を妄信したから』とのみは云はれないのである。

そう考へると、此の悲しむ可き虐殺事件の責任は翼東解消事件に端を發してゐると見られるのである。即ち日本の外務省の道德的責任も大きい。彼れ等は今如何の厚顏かあつて、二百の生靈とその遺族に合せる顏があるかと聞き度い。

（八）『九ケ國條約』廢棄を繰ふ外務省

彼れ等は『九ケ國條約』を廢棄する事には今迄絕對に反對であつたのである。その理由は判らない。理由を口に云はぬから、云へないやうな隱微な不公明な理由があるらしい。皮相的に考へれば彼等の聯盟主義、世界主義、國際公法主義であるが、その實は親英親蔣主義であらう。

本來『九ケ國條約』なるものは、支那が排日を始めると同時に日本は一應先方に警告して、それで肯かなければ、當然廢棄して差閊へなかつたのである。即ち

『日本は支那の主權を尊重して、一日も早く支那が獨立國家の實を擧げるやう列國と協力して「九ケ國條約」を遵守して來たが、支那がかくも日本に敵意ある運動を國家として公然行ふやうでは もう日本は「九ケ國條約」の如きものに參加する好意を持たない』

と斷然列國に聲明す可きであつたのに、彼れ等はそれを氣が付いてゐ乍ら、どうしても或るものに抑へられてそれをやり得なかつたのである。

私の如きは昭和八年の頃から、

『日本は「九ケ國條約」を廢棄す可し。或は廢棄の目的をもつて、改訂會議を起す可し。』

と主張して來たし、諸家が熱心に廢棄脫退を叫んだが、彼れ等當局は頑として、その意志を曲げなかつたのである。

だが、如何に非廢棄主義者も、國民が漸く外務省打倒の動きを見せて來たので、特に、省內に『親蔣主義排擊』『反廣田』の聲が漸く起らむとして來たのを見るや、慄然として恐れをなし、漸く〳〵當年三月十八日の衆議院豫算總會に於いて、西岡竹次郎氏の質問應答に際して、不徹底乍ら廢棄の意志を言明する事になつたのである。即ち、

『西岡氏、九ケ國條約は今次事變においても日本の行動を束縛してゐる。所謂領土の不侵略といふ聲明もこの點から來てゐると思ふが如何、

外相、領土的野心がないといふのは九ケ國條約の原則から來てゐるのではない、日本の對支政策から出發してゐる、この條約は有名無實であるが、適當な時機が來れば事實上廢棄するやうな手段を取り度い』

と言明してゐる。此の言明を見ても、彼れ等が今日迄國民の意志に反して『九ケ國條約』を守り續けて來た事が不當不正頗る間違つた事なのが明白になつたのである。

處で廣田外相は『適當な時期が來れば』と云つてゐるが、過去に於いて實に十回も二十回もそう云ふ機會があつたのに、それを掴まずに、之れを將來に俟つと云ふが、どんな機會が來るか拜見したいものである。

それ所か、北支中華民國を承認して了へば、廢棄の機會なぞは永久に來ない筈である。それ故どうしても承認以前に廢棄しなくてはならぬが、そんな機會が來るかどうか疑問である。もし廢棄前に北支中華民國を承認するとなると、東洋の指導者たる吾々は東洋の指導權を列國に監督される計りか、吾々の占領した地方に於ける保護國同然の中華民國に對して列國と共同でその主權を尊重しなくてはならないのである。馬鹿々々しいとも何とも云ひ樣はないのである。

もし此の時『中華民國』なる國號を棄てて、大漢國聯邦を起させれば、それの間隙に於て『九ケ國條約』は廢棄同然になるので、吾々は多少の運動する處もあつたが、彼れ等は『中華民國』の國號を愛惜して、遂に此の英斷に出づる事が出來なかつたのである。

『豎子國を誤る』

とは、斯くの如きを云ふのである。

恐らく、國民にして奮起せずんば、英佛米ソ聯等の暗躍によつて、吾が國は再び『九ケ國條約』再認識をさせられる樣な羽目に陷るなきやを恐れるのである。今日現在の英國の極東外交の動きは慥にそれを目標としてゐるのである。そうして又、日本の國內にそれに迎合せむとするものがあるので、之れ等の輩が、その時迄『九ケ國條約』を生かして置き度がつてゐるのである。或は蔣政府を生かして置いて、一日も早く和議を成立させて、その時『九ケ國條約』を再承認しやうといてゐる外交官が存在する事は衆知の事實で、又之は一部の人々の豫想する如く第二華府會議開催の伏線となるもので、吾々は之れを大聲疾呼して國民に警戒する必要があるのである。

之れ等の外交官等は、數年後に於いて、蔣介石一派が日本に激しい復仇を企圖してゐる事を知り乍ら、斯くの如き措置に出でむとする心理は偏へに彼れ等の親英親蔣親猶心理の故である。

（九）國民政府助命主義は賣國思想也

私は吾が政府の『國民政府助命主義』さう云つて惡くば、『國民政府への勸降主義』と云はう、之れの眞意を解するに苦しむものである。

本來國民政府は日本とは不俱戴天の立場にある政權である。それ故彼れ等を一反降參させた處で、彼れ等は本心から日本に恭順するものではない。彼れ等が再び第三回の抗戰を策する事は火を見るよりも明らかである。彼れ等の如く一反支那を統一した經驗を味つたものが、どうして此の儘和睦して日本の與へる條件の下に穩かに親日政權として滿足するであらうか。決して滿足するものではない。必ずや彼れ等は機會ある毎に再起して日本に復仇せんとする。さうして其の時期は日本が、ロシヤ、或は英國と戰ふ時である。此の時に『好期至れり』となして、彼れ等は其の全軍を提げて蹶起する筈である。今度の日支事變による經驗は彼れ等を今日よりは遙に强い力をもつたものとして再生させる。彼れ等の其の時の空軍も今日の樣なものではあるまい。然も其の時日本は彼れ等如きを對手にする餘裕がないかも知れぬ。其の時に彼れ等の存在は日本に取つて非常に厄介な代物となるのである。之れ丈けの事は吾が政府當局も好く理解してゐる筈である

然も尙且つ彼れ等を助けやうとする心理は何か？

私には不可解と云ふより外はない。

或は日本は之れ以上長く戰ふ事は困難なのか？

決して然らず、見よ、百萬の精兵を送つてもまだ國內には何百萬の精兵が存在してゐるではないか。軍器の生產能力は張り切つてゐる。資源は充滿してゐる。物價は平衡を保つてゐる。經濟的にも何等の困難はない。今度の戰爭の爲めに只伸びる可き景氣が抑へられてゐると云ふ丈けで經濟界は戰爭の爲めと云つては殆んど苦しい兆候を示してゐない。卽ち日本はまだ何年でも戰へる。其の日本が僅か三ヶ月戰つて、然ももう戰ひに倦怠して蔣政府に降參を勸誘する必要のある筈はあり得ない。軍部は『戰爭は之れからだ』と云ふ。國民も其の覺悟である。その爲めにこそ吾々は年來、長期戰爭の爲めに熱心な用意をして來たのではないか。然も政府丈けは戰爭を早く切上げる爲めに、斯くも無理な方法で蔣政府に降參を勸めてゐる。『蔣一派の下野、國民黨の解黨軍備制限』と云ふ根本保證には指一本も觸れないと云ふのだ。其の眞意はホト〳〵吾れ〳〵の解釋に苦しむ處である。之れは要するに親英親蔣派の策動と云ふより外に解釋の仕樣はないのである。夫れなら、なぜ彼れ等は斯く迄蔣政府を降參させたがるのか？

此の理由は彼れ等の腹の中に立入らなくては判らぬ處の秘密である。

吾れ〳〵は今日、蔣政府を助けやうとするが如きものは、『賣國的行爲をなすものなり』と斷言して憚らぬのである。日本の外務省が國府の否認を回避しやうと努力して、遂に『對手にせず』と云ふ聲明を出す如き無理をして、然も目的を達せず、遂に十八日聲明に於いて漸く兜を脱いで、蔣政府を完全に否認するの餘儀なきに至つた此の徑路を見るならば、少しく眼光の事背に徹するものにとつては、澤山の不可解なる謎を看取するのである。尙之れについては雜誌『大日』一月十五日號中『國民政府抹殺を嫌ふ外務當局』なる題下に述べて外務省の親英主義を排擊して置いたので、本稿では之れ以上は述べない。

（十）國民は警戒せよ

此の謎を國民は警戒しなくてはならない。此の謎は十八日の聲明で無理に抑へられてはゐるが滅亡はしない。依然として、其の作用を蓄へて待機してゐる。

（イ）之れは然る可き處置を講ぜぬ限り、日本の對支問題解決の癌となつて長く存在するであらう。之れは將來も蔣政府に對して何等かの同情的態度となつて現れるだらう。

（ロ）絶えず日英親善熱を煽ると共に、日英戰爭の發生を妨害するだらう。然も日露戰爭の爲めの親英主義でないから、英國が他日勢力を得る時、日本は大なる清算をさせられるだらう。

（ハ）防共三國同盟に對して好意を示さず、或は妨害的に働くかも知れぬ。在野自由主義者が之れに對して好意を示さず、時あつて、之れを妨害せんとして機會を狙つてゐる心理と何か相通ふものを彼れ等親英親蔣派は持つてゐるかも知れない。意識的無意識的に日獨同盟を破壞せむとして、策動しつつあるスパイが日本の國内にも相當居ると傳へられるが、彼れ等の利用するものは先づ、自由主義者、反軍主義者、親英親蔣主義者、反ファッショ主義者なのである。

（ニ）日本が今日、獨伊に對して眞に積極的に働き掛けたなら日獨伊の攻守同盟は必ずや完全に成立する。處が日本に夫れ丈けの熱心が起らぬのは、國内に親英親蔣派がさう云ふ積極行爲を痳痺させてゐるからである。

今や日本國民は單に白眼をもつて警戒のみを爲す可き時ではない。斷乎として親英親蔣派を壓伏、國論を統一して、眞に軍民一體、火の玉の如くなつて、非常時解決に突進しなくてはならないのである。今日の如き微溫狀態にあつては『全國總動員』の運動は遂に一つの空題目に終るなきやを恐れるのである。演說會などで臭いものに蓋をする如く之れ等一派の問題に觸れるのを禁

じたりする警察があるが、之れは寧ろ認識不足な人達と云ふ可きである。

（ホ）更に彼れ等は北支中華民國の承認を澁るだらう。國民政府否認を嫌つた心理は、必ずや、北支臨時政府の承認を嫌ふ心理として現れる事は大體に於いて明らかな事であつた。

果せる哉、日本の外務省は玆でも又、承認躊躇の氣振を示してゐる。出先軍部は頻に北支政權を迅速に承認せよと促しつつあつたが、何かと云つて、承認を澁つてゐるものは實に親英親蔣派で、その理由たるや、極めて薄弱である。即ち過日の議會に於いて廣田外相は岡喜七郎氏の北支政權承認に關する質問に對して

『北支の新政權は、もつと主權を使用し得る領土が廣くならなければ承認出來ない。』

と云ふ意味の事しか述べ得なかつたのである。

その上、之れは間違も甚しき考へで、北支中華民國は假りに舊直隷省一つでも國家を樹てるのに差支へはないのである。西洋にはモナコの樣な小さい國がある。土地の廣狹の如きは問題にならぬのである。

同一の質問に對して、二月廿五日の貴族院豫算分科會では杉山陸相は正論を吐いてゐる。即ち

『軍としては占據地域の廣狹は問題にしない。只新政權かその基礎を確立し、親日防共の政策を實行するに

至れば、承認もし、提携もする。』

と云つてゐる。

處で、之の兩相の答辯は食ひ違つてゐる。それは廣田外相の答辯が間違つてゐるからであるが併し一應は問題にする程の事ではなく、外相の答辯は何か陽氣の加減だらう位に扱はれ得るものである。だが、平素の中華民國助命主義の立場から考へる時に、之れは極めて注意す可き聲明也と考へ度い。つまり『北支中華民國を何時承認するか』と云ふ大問題を本當に考へて居らず、只出來る丈け引張らうとしてゐるから突嗟には承認延期の妥當な理由を述べる事が出來なかつた計りでなく、其の上、こんな無理な答辯をせざるを得なかつたのである。即ち云ふに落ちず、語るに落ちるものである。

私は杉山陸相の答辯には文句はない。然し滿足だとは云はない。即ち日本としては、政權が確立するしないなぞは問題でない。日本の力によつて確立すると云ふ見通しが付けば、遠慮なく承認す可きである。支那の政權なぞは、日本が否定すれば國民政府すら倒れる。日本が擁護すれば滿洲國の如きでさえ確立する。然らば北支政權の確立と非確立とは日本の承認の有無が第一條件なのである。日本が承認する刹那に確立する。日本が承認しない內は決して確立するものではな

い。尤もそう正直に議會で云へとは云はぬが、兎に角日本の軍部が、外務省の此の承認延期主義なぞに影響される事なく、偏へに前述の如き大覺悟で北支中支の政權を指導せられむ事を望むや切なるものがある。そうすれば今頃は中支の政權は尙以上の有力なものになつてゐるのである。

（十一）外務省抹殺すべし

要するに、外務省は日本國內の雖れ小島だ。彼れ等は日本帝國の官吏であり乍ら、恰も駐日外國使臣の如く、治外法權の外務省に頑張つて、國民の意志と聲とは知らざるを眞似してゐる連中である。その積年の惡弊が凝つて川越一派の蔣介石擁護となつて外へ現れたのだ。今日でも彼れ等は年來支那の統一國家を讃美し、宣傳してゐた行掛り上、かくも日本にとつて大必要なる中華民國の國家承認の取消は勿論、蔣介石政權否認すら欲しないのである。

之れは單に今迄の行掛上欲しないのだ。いや、もつと深刻なる理由で欲しないのかも知れぬが少くも表面に現れた處では、事變前に支那の統一國家を後援し、推賞し、讃美して、恰も支那より駐日大使として赴任したるが如く、至る處で、南京政府の爲めに、日本國民の信用を博するに勤めた行き掛りだと見るより外に、一寸解釋しやうはない、彼等が行く時は　天皇の使臣として行き、歸りには蔣介石の使臣として日本軍部の支那論打倒の使命を帶びて來朝したるかの如き態度で歸つて來る不可思議な有樣は、吾々に深刻なる義憤の感情を與へたものである。

誠に國民政府と共に打倒す可きものは、日本の外交官一派であると思ふ。由來日本の外交官は國民から對手にされない。だが今日は彼れ等を對手にしない丈けでは濟まない、よろしく例の『否認以上』を食らはす可き時であらう。誠に中華民國を抹殺すると共に、外務省を抹殺する必要がある。今や『外務省抹殺論』を捲き起す可き時である。

世人は外務省の異名を『霞ヶ關』と云ふ。然し將來は『霞ヶ關』の愛稱は海軍省に轉移す可きである。そうして『三宅坂と霞ヶ關』の對句をもつて陸海兩軍を指稱する事にし度い。之れが物の大自然である。今日の外務省は『害無省』に非ずして『有害省』でさへある。非常時になると、澁々乍ら國家の大策に追隨する樣子を示すが、非常時が弛緩すると又元の地金に歸つて、國家の大策を無視して、彼れ等の親英道樂に逆轉して、背後から國家の大策を傷けむとする。否、非常時局にあつても、彼れ等が澁々嫌々國家の大策に付いて行く結果、意外なる障害を國家の前途に橫へた事は實例がいくらでもある。例へば、ジュネーヴに於ける松岡代表の脫退を國際聯盟が豫期しなかつたのは、我が親英派の意志を日本の意志也と誤認した結果也と云はれる。日本非脫退

說は一般に親英派の巨頭吉田茂氏等の口から英大使に洩れたと風評されてゐる。

今日の支那問題が思ふ樣に解決しないのは、彼れ等親英派が絕えず軟弱なる立前を、英國及び支那に對して表白してゐるからと見られてゐる。それでなくば、英國は已でに蔣政府を見捨てて舊中國は右往左往、遂に陝西省の奥地へ逃込んで赤匪となつてゐる筈である。之れでは吾々は外務省を目して『有害省』と云ふのは必しも誣言ではあるまい。若しそれ、彼れ等の國策逆行が事毎に日本の幸福として轉化するのは、偏へに日本の實力の結果なのである。彼れ等が眞に虛心坦懷、軍部と協力すれば、尙遙かに滑らかに吾が國策は實現し、國運は開展するのである。

誠に此の樣な外交官を對外的眼鏡としてゐる近衛首相の心眼が曇つて居るからこそ、一月十六日の微温的聲明となつたのである。然も首相は、まだ强硬派と親英親蔣派の中間にあつて、硬軟左右にグラ〳〵動搖してゐるからこそ、十八日の硬化聲明ともなつたわけで、誠に心細い限りである。日本が此の乾坤一擲の非常事業を敢行せむとする時に當つて、かくも不徹底な氣持で、責任の地位に立つて居られたでは、吾々としては國家の前途に對して深憂に耐えざるものがある。已でに、日本當局の對支意見が昔から軟弱であると云ふ事が、對支問題を今日の如き難局に導いたのであるが、今日現在でも、さう云ふ惡影響は存在してゐるのである。即ち

三月六日の『東京日日新聞』の『國府の崩壞今や寸前、戰果確保、一氣押切れ』の項に曰く、

『日本の支那における目下の立場は遠大な戰果を達成するに躊躇してゐるが如き觀を一航に與へてゐる。この觀測が一つの間隙となつて國民政府の命脈が逐次破綻に向ひながらも逆に事態の複雜性が增さんとすることは極めて不利である。かくの如き誤れる觀念を一掃するためには日本が軍事的に政治的に一氣で押切る決意で進むことである、極東の事態はこれによつてはじめて牽制或は障碍を突破して解決するものであることをこの際日本が特に考ふべき重大なポイントである』

とある。即ち日本の態度が曖昧不徹底だからこそ、時局は容易に落着せず、國民政府は沒落一歩手前で、依然として、命脈を保つてゐるのだと云ふ報道なのである。之れは敢へて新聞の報道を待ち、或は之れを引用する迄もなく判り切つた事ではあるが、併し、事實報道は我々の單なる論辯とは又別の威力をもつてゐるので特に引用して置く。

付記

本書脫稿の頃は此の新聞の豫言は益々適中して、今日國民政府は『命脈を保つ』處ではなく、彼れ等は着々として元氣を恢復し、國際情勢も彼れ等に頗る有利に展開しつつあるのである。徒に我々は强硬を叫ぶのではない。中支に於いて斯くの如き軟弱なる消極態勢を取る事は日本が只

ソ聯に對して積極的に出る場合にのみ許されるのであるが、吾々の心眼に映つた處では、必しも大に伸びんが爲めに縮んでゐる許りではなくて、一面に於いて親英親蔣派の策動によつて、斯くの如くである現狀に對して誠に深憂に耐えないのである。

（十二）改革の方策

然らば外務省をどうすれば好いと云ふのか？

（一）先づ第一に彼れ等に國士教育を施す事が肝要肝腎である。即ち日本の歴史と武士道精神を教へ込むのが好い。それも御役目的暗記的でなくて、感化的に教へる必要がある。

採用試驗に外國語の論文を課するのは、尤も愚劣である。大學卒業位で外國語の論文を書ける樣になるには彼れ等は餘程外國語を勉强するか、或は何かインチキな勉强の仕方をするか兎に角之れ丈けで、人間が駄目になる事は受合である。外交官が外國語の論文を書く必要は絶對的ではない。之れは唯演說をする時の必要に過ぎないのである。演說なぞは代作で充分である。

（二）武道を必習科目として、柔劍道共に初段、合せて二段以上でなくば正式に外交官たらしめではならない。大使公使になつても、練習を休ましてはならぬ。從つて海外の公使館大使館にもどんな小い處へも武神の宮と武道の道場を設備せしむ可きである。外交官は紳士に非ず、武士である。そう云ふ理想を揭げるなら、武道の練習なぞ問題ではない。此の兩項によつて心身兩面から鍛錬された日本人でなくては、外國の人士を對手に日本人の威嚴を保つて行く事が出來ない。

又これによつて今日の『霞ヶ關空氣』なる廢頽的、虛榮的、享樂的、弛緩的な奇妙な雰圍氣を一變せしめる事が出來る。誠に之れ丈けで外務省の惰氣一掃、國民の尊敬を集める樣な大外交家、陸奥、副島、山座、小村なぞの先輩に劣らぬ豪物を輩出する事受合である。

それなら廣田杉村の如き快男子が大外交家になれぬのはどう云ふわけかと聞く人があるかもしれぬが、廣田氏の如きは柔道をやつた結果、外務省の空氣に去勢されず、幾分たりとも豪傑の資を殘し得たから、兎に角あそこ迄漕ぎ付け得たので、然らずんば今頃は局長か何かで老朽凋碎してゐる時分である。彼れは外務大臣になると共に精神に變化を起し、尋いで、首相になると共に非常な親英派に轉換したが、彼れ自身の云ふが如く、本當に玄洋社の精神が堅まつてゐないからあんな迎合派になつて了つたのである。杉村氏の如きは體格で胡麻化した柔道家で、本當の體術家ではない。特に彼れは日本精神の教養がないから忽ち外務省の空氣の中で軟化して了つて、今日の有樣である。兎に角二人や三人、『武道を修業致候』と云ふ人間が入つて行つても、日本人ら

しい主角を現せば忽ち仲間外れにされて、一生無風帶の風車となつて終らねばならぬので、問題にならぬ。そうやつて幾多硬骨剛腸の士が惜しくも葬られて、今日の外務省の空氣が出來上つたので我々は之れ等一切の沈滯空氣を抹殺して、眞新しい外務省を再建しなくてはならぬ。

外務省的人物主義の失敗は齋藤大使に於いて如實に見る事が出來る。彼れは外務省第一等の英語の達者な人物で、練達硬骨の士として擢でられて駐米大使の大責任を負ふたものであるが、彼れは日支事變の始まるや宋美齡女史と日支立會演說をやつたものである。その時の彼れの態度は全く上つて了つて息をぜい〳〵やつて吃つて了つて完全に蔣夫人に叩きつけられて了つたと見てゐた日本人が日本の大新聞に書いてゐるが、之れが　天皇の大使者、武士道日本の國家の代表なのだから外務省の人物主義の欠陷が好く判るのである。

更に外交官採用方針も遙に自由にしなくてはならぬ。白人語が出來なくても、支那語の出來るものには出頭の門を開かなくてはならぬ。又駐支大使は今日では向ふが日本語が出來るから、外國語が話せなくても、外國文、特に支那時文が讀める人物なら差支へないわけで、要はその心材にある。川越氏や某々の如き人々を何人やつても駄目である。それよりも軍部邊りから人物を引張つて來て、大使になつて貰ふに限る。日本の豫備軍人には大使公使の適任者が餘り返つてゐる。

外務大臣も豫備軍人にやらせるに限る。若し次官に白鳥、谷兩氏の如きを得なば、荒木、末次、野村、大角、米內、山本、皆歷代の外務大臣より何層倍か上わ手の大臣である。荒木末次兩將軍の如きは自分では『役不足だ』と云ふに相違ない。勿論今更外相の椅子を擬するわけではないが、兎に角、外相に据えて見度い人だ。之は尤も手輕な改革で之で一寸息を吹返すだらう。

抑々外務省に主管大臣の器なく、軍部に外務大臣がいくらでも轉つてゐるのを見ても、外務省人は大に三省一番す可き處だ。それは外務省へ、人間の屑が集まるわけではないが、何分にも日本人として性格的思想的の屑が集る。それが中の空氣で更に屑になり、海外の享樂生活で、屑に輪をかけて本當の屑となつて了ふのである。外務省の青年が本來人間として屑でないのは矢張り體格優秀の人物もゐれば、明敏な表情をした人間も居り、學校の成績の好かつた人間もゐるので判る。只外務省の空氣を吸ひ、海外の生活を續ける內に、漸次に人間の屑になつて了ふのである

今日は機構の問題が矢喧しくなつてゐるが、外務省は對外國策に於いては特に支那に關しては完全に失敗してゐる。從つてその共同責任として對外發言權は玆十年間は遠慮す可きである。今迄怠けてゐたのだから玆十年間も外部的には怠けてゐると同樣の開店休業をし乍ら、その間默々として日本主義青年の教養に盡瘁するのが己れを知るものの道である。又日本道自覺の第一歩で

ある。差當つて先づ全部の外務官吏を從軍させて、軍人の働を見物させるのが最良策である。

今日の重大問題は『對支經營機構の所屬をどうするか』と云ふ事である樣であるが、本來社交的外務省の事務に適せざる政治、經濟、文化の工作等は斷じて、外務省と關係させる必要のないものである。支那はマニラやヒリツピンとは違ふ。そんな出稼殖民地の積りで外務省に輕々しく任せられるものではない。外務省の提案は全然問題にならない。

それなら本來外務省に屬する仕事はどうかと云ふのが問題だが、新たに承認さる可き中華民國は日本にとつて滿洲國同然の國である。內地の延長みたいなもので、他人行儀の國ではないから玆でも外務省の外交官なぞの働く餘地は極めて少ない。然し少し位は名目的に殘す必要もあるかも知れぬが、本來彼等は昔から支那嫌なのだから支那を此際取上げられた迚文句はない筈である。

國民の意志は之れだ。然るに二三ケ月前迄は川越氏を新中華民國の大使に再任するなぞと眞面目腐つて、考へてゐたのだから、外務省の御目出度さは臍茶物である。兎に角支那に用ふるなら川越氏は大禁物で、白鳥、谷、大鷹等の轉向派を重用して見るのが論行行賞の意味で尤も妥當であらう。白鳥氏の活躍は尤も高く評價さる可く、谷氏之れに次ぐと云ふ可きだらう。

上海事變後堀口九萬一氏も俄かに轉向して日本主義者になつて、恰で母親の腹から日の丸を擔いて生れた樣な轉向振りだから日本主義者拂底の今日老人乍ら何かの役には立つかも知れない。

土着大臣なら是非小幡酉吉氏を起用すると云ふ說があるが、之れは省內での日本的先覺者への禮であらう。吉田派は盛んに小幡氏に對して『老衰した』なぞと惡評するが、小幡氏位に老衰してゐる者は澤山あるのである。吉田派は思想と性格が老衰してゐる爲めに、今日の外交顚落を來したので、少し位健康や聽覺の老衰は思想性格の剛健によつて補へると思ふ。

『本多熊太郎氏なぞが外相になつたらそれこそ外務省全體でボイコットする』

と息まいてゐるとの事であるが、然し本多氏の適不適は私には判らぬが、兎に角、早晩天下り外相に對して、外務省がそう云ふボイコットをやる樣な日が來るかもしれぬが、その時は國民は冷靜に之れを批判して、いやしくも曲のある側に向つては寸毫も假借する處なく反省を求めるの用意を怠る事は出來ない。更に現在の親英閥の頭株を全部引退させる事も必要である。吉田重光廣田堀內杉村なぞと云ふ人達は必ず引退して貰ふ必要がある。親蔣派と目されてゐる川越氏や其の他の某々なぞと云ふ連中も當然引退す可き人々であらう。

將來、支那全土は日本にとつて外國にして、外國に非ず、それ故世人の云ふが如く、對支事務は當然滿洲國同樣に扱ふ可きで、只形式的必要があつたら、駐在司令官か何かに大使を兼ねさせ

て外務省には舊中華民國丈けを委せれば好いので、斯うすれば外交二元の心配はなくなる。

そうなると、日本の外務省の仕事は非常に縮少される譯である。その時には、外務省を廢して一局一課と爲して、首相に直屬させるなぞと云ふ樣な說も一方法であらう。人氣が惡くなると嫌がらせに色々の事を云はれるもので氣の毒ではあるが、兎に角外務省が支那に於ける實權を握らうとして、非常に運動してゐる相であるが無理である。勢力擴大なぞとは氣狂の沙汰である。身の程知らずである。誠に外務省抹殺論の起る所以を反省する必要があるのである。

（十三）列國の新聞及び新聞記者を買收する蔣政府

蔣政府が列國の新聞、及び新聞記者に賂ふ月額と云ふものは實に莫大なものと云はれる。それは秘密になつてゐるが、然し此の間『東日』には北平の英人新聞や、ルーター社に與へてゐる賄賂が素ッ破拔かれてあつたが、之は何處の國でもやる事で珍しくはないが、左に引用する。卽ち國民政府が新聞事業に毎月支出した經費の議事錄が同紙三月十五日號に出てゐたが、々々此の會議錄によると

『民國廿五年八月六日午前八時から南京中央黨部第一會議廳で丁惟汾議長の下に葉楚傖、陳立夫、陳果夫、張繼、周啓剛、周佛海等出席して開かれた會議において ルーター社への宣傳費支給を決議したもので議事錄の中には「新聞事業每月經費」の項目があり、その中に當時北平にあつて表面英國人の經營となつてゐた北平クロニクル紙への豫算月額四千元が編みこまれ、更に「新聞事業每月奬勵金」四萬五百八十元中その四分の一を占める一萬元がルーター社に補助費として每月送られてゐたことが明示してある。これを見ても國民政府が如何にルーター社引込みに力を注いでゐたかどうかがうかがはれる。々々』

日本の新聞なぞでも、蔣政府や猶太財閥から金を貰つてゐるものがあると專ら評判にされてゐるが何社であるか私は知らない。併しそれは人々が好く注意して見られれば自然に判る筈と云はれてゐる。卽ち外務省や一部財閥の親英主義と相呼應して、日支事變を通じて、絕えず講和主義を仄めかしてゐた新聞がそれだと一般から睨まれてゐる。或は意識的無意識的に猶太財閥の爪牙となつてゐると云はれてゐる資本家と關係のある新聞や新聞人が一般から蔣政府の走狗だと疑はれてゐるのである。

英國の外交官の如きは、猶太人でないものでも、猶太財閥の走狗であり、蔣政府と結托してゐる彼れ等は英本國の福祉なぞは眼中に置かずに支那で勝手な事をやつてゐる。その尻馬に佛米其の

他の國の外交官や新聞記者が乘つて上海南京香港を中心とした援蔣派を形成するのである。彼れ等の行動は本國の外交政策を遊離したもので、然も必しも蔣政府の幸福を目睹したものではなく究極に於いて猶太財閥の世界征伏の走狗として働く結果になると云はれる。

吾が日本の外交官なぞも、之の三ツ巴の尻尾へ捲き込まれてゐなければ幸である。眞逆とは思ふが、彼れ等猶太財閥や蔣政府は何者に限らず、用ひて役に立つと思へば、何でも捲き込まずにはゐないのである。日本の外交官が餘りに國民政府に不自然な好意を示すと、吾々は彼れ等の心理狀態を説明するのに、遂、斯う云ふ憶測をする樣になるのである。

（十四） 日支事變は日本外交官の責任也

東京講演會の雜誌『講演』を見ると『東京日日新聞』の東亜通吉岡文六氏が、蔣氏をして日本挑發に走らせた有力な原因の一つとして、日本のジャーナリズムの責任を擧げてゐるが、實に面白い觀察である。卽ちそれは左の如き文句である。

『それから今一つは日本自體のヂャーナリズムである。吾々もその責任があるかも知れないけれども、例へば日本の權威のある雜誌に於きまする所の日本論を見て御覽なさい、殆ど左翼論評であります。右翼の雜誌

を除いた日本のヂャーナリズムは、大抵日本の脆弱面を書現さなければ論文の價値がないやうに考へる風があつたのであります。これは日本內部の評價に於きましてはそれで結構であります。內部評價に於きましては、日本が發展して行く一つの出發點になるだらうと思ふ。常に自分の缺陷を知つて警戒して行くといふことは大變好いことだらうと思ふ。これが今までの日本の發展の一つの政治的な基礎になつて居つたかも知れん。でありますから、これを日本の實體に觸れない所の南京側から見まするとと、私はやはり支那の左翼の學者が日本分析をやつたものを裏書することになつて來るだらうと思ひます。之はヂャーナリスト御自身がヂャーナリズムの惡弊を衝いてゐるのだから裏書の樣なものでございまして私も全然同感でございます。文句としては之だけのものですけれども、之が爲に日支の國交を誤り、蔣介石に重大な誤算を爲さしめ、遂に此の全面的大衝突を起しました惨禍の幾分の幾つが之等ジャーナリストの責任でありとせば、切つて以て軍門に殉へて可なる程の罪ではないか、之に反して日頃から日本の眞の實力を彼等に認識せしむる樣に働いて居ましたならば、その效果は全く趣きを異にした積極的なものになるのでございます。思ふて玆に至りまするとジャーナリズム國を誤ると申してもよろしいかと思ひます』

之れは實に面白い引用である。實は中里介山氏の『日本文學の墮落』中に引用してあつたものの再引で、本書の題目には一寸餘計な事であるが、然しヂヤーナリスト自身が

『日本のヂヤーナリズムが日支事變の原因である』

と云ふ處は如何にも價値のある文獻で、誠に割愛するのに惜しいので引用する次第だが、吉岡君の說には何人も同意するであらう。特に彼自身がヂヤーナリストであり乍らも

『ヂヤーナリストの首を斬つて軍門に殉へよ』

と絕叫するに至つては、吾々をして思はず、襟を正して聞かざるを得ざらしむる底の慨があるのである。

處で、私は首を斬つて軍門に揭ぐ可きもの、豈、新聞記者のみならんや、日支事變は、日本の新聞の責任である。以上に、日本の外交官の責任であると叫び度いのである。

國民政府が日本の意志を打診する方法の第一は先つ外交官であらう。之れは一應の常識である。處が日本の外交官なるものは全く日本國民と隔離した存在であり、外務省は離れ小島の如きものだと知つたなら、ヒツトラー總統の如く、大使に武官を任用して霞ヶ關へ行く代りに三宅坂へ行かせるが、蔣氏にはそんな事は出來ない。何でも日本の意志を打診するには、英國を恐れ、支那

を恐れ、蔣氏の云ふ事を唯々諾々としてロボットの如く受け入れる日本の外交官、辰丸事件の排日以來、掛合腰の恐ろしく弱い日本の外交官、要人の前で絕えず自國の軍部の惡口を云ひ、軍部の意志と逆行する事を尤も喜び、國內の反軍思想に同情して、之れを誇張的に話して聞かせる日本の外交官、外人を崇拜する事を之れ事としてゐる外交官、「弱い者には強いが、強い者には恐ろしく弱い」と云はれる日本の外交官、日本の國體を信仰しない日本の外交官によつて、日本の意志を打診した蔣氏が如何なる日本觀を持つたか思ひ央ばに過ぎるものがある。然も之れ等離れ小島——日蓮上人の意味する『日本』なる離れ小島ではなくて、『霞ヶ關』なる離れ小島の使者達は自分達は日本全體の意志を受けてゐるかの如く蔣氏の前には振舞ふに於いては、蔣氏たるもの、日本の意志を益々誤解して、

『日本與みし易し』

と思つた事に不思議はないのである。蔣氏が日本の軍部、或は國民と直接對手にならんとする如き聰明さを持つてゐたなら、恐らく今日の樣に沒落の非運に陷らなくて濟んだらうと思ふ。

然し運命は皮肉だ。日本の外交官があつたからこそ蔣氏が日本を馬鹿にして日支事變を開いた。その御蔭で、日本は支那沿岸各省を占領する事が出來るとなると『春秋』の筆法で云へば外務省

の功勳は蓋し軍部に次ぐと云へる。更に彼れ等の根強い親英主義者との默契によつて、蔣政府は中々倒れない。故に日本はいつ迄も支那の占領地を席捲して遂には四川の奥迄占領出來るとなると、支那を日本に與へたものは日本の親英主義者だとなる。世の中は何が仕合せになるか判らぬ。だが、之れ等は皆親英主義者の怪我の功名であつて、支那全土の征服は彼れ等の意志に反して居り、實は彼れ等は今も昔も中華民國存續論者、蔣政府助命主義者である事を考へるなら、國民は毫厘も彼等に感謝する必要はないのである。

（十五） 戰時內閣の改造必要

兎に角、此の內閣々僚は近衛公の人氣の上に晏然として眠つて居ると見られてゐる。三月二十四日の國民總動員法案審議に際しても現閣僚が極めて惰眠を貪つてゐた事が暴露されたが、かくの如き例は澤山あるが、それだからだ外務省とその親英主義がどうにも始末出來ないのである。だが此の非常時局に於いて、內閣首腦が斯くも寢呆けてゐて好いものだらうか？

之れで果して禹域四百餘州に散つた皇軍の戰士の骨が滿足に拾へるだらうか？ 覺束ないものである。況んや英露を叩き付ける事に於いてをやである。さうするには少くとも內閣を改造しなくてはならぬ。どうせ日本は近衛內閣より好い內閣を造り得ずとすれば、此の內閣を改造して行くより外はない。だが併し本當の戰時內閣を作るには『學友內閣』『友達內閣』は御免だ。人氣の溫床に弛緩してゐる閣僚は駄目である。本當に硬骨な豪傑の士を引入れて、親英親蔣派の勢力を一掃し、外務大臣には軍人の秀俊を持つて來て

『さあ來い』

と云ふのでなくては此の大非常時は滿足に乘切れるものではない。よろしく國民は現內閣の能力を再認識して萬遺憾なき改造を行はしめて次の長期應戰の大事業に向ふ可きである。

兎に角、國民にとつて必ず承知すべき事は私見に依れば

（一） 現內閣は對支問題解決に付いては極めて其の態度軟弱である事。

（二） 又其の點に付いては國民以上に獨逸の大使と蔣介石氏と英國とが知つてゐる事。それは國民には講和の臭も嗅がせずにその交渉をしてゐた事でも判る事。

（三） 英國が之れを知つてゐるからこそ此の根強い援蔣的態度を持續せる事。

（四） 現內閣の軟弱的態度は時局解決の理想から頗る遠ざかつてゐる事。

（五） 斯くの如き軟弱妥協的態度は偏に親英親蔣派の暗躍によるの結果なる事。吾々は國內に於

ける親英親蔣派を排斥する。特に秘密親英親蔣主義を排撃する。秘密的暗躍は概して不正である。

（六）彼れ等の策動を抑へなくては本當の擧國一致國家總動員は不可能である。之れ等親英親蔣派が軍民一體の擧國一致を妨げつつある事。

（七）之等の爲めには內閣改造不可避なる事。改造せざる親英的內閣は無條件に支持す可からざる事。

（八）英國は日本の軍部と國民の斷乎たる意志を知れば、早速急旋回して援蔣態度を捨て去る事。

（九）然らずんば英國は吾が國內の親英派と呼應して、必ずや强制的に日支調停に乘出し來る可き事。

（十）日露開戰の準備として以外に斷じて日本は英國と妥協す可からざる事。

之れ丈けは國民は好く〳〵覺悟して內閣を鼓舞激勵、時に叱咤鞭韃しなくては到底此の非常時を乘切れるものではない。辯護士正木昊君の雜誌『近きより』に

『國民政府を對手にせず』を皮肉つて

『國民、政府を對手にせず』

と出てゐたが、日本の軟弱政府を揶揄し得て頗る妙だが、今日の日本はまだ自國の政府を見限つては困る。國家國民の爲めにも此の政府を何とか支援して此の非常時を切り拔けて行かなくてはならない。然しそれには政府も亦、自肅自戒、大に軍部と國民の意志に副ふ樣、外、百萬の將士の心を心として國政と外交とを導いて貰ひ度いのである。

付記

此の二十日に本冊子は組上つて、近日將に印刷に付せむとせる時突如、二十七日に我々待望の軍人外相が出現して誠に慶賀に耐えない。そうして又、內閣が强い力を揮い起して立上つた事も親取されて、誠に欣幸に耐えない。だが併し之によつて、外務省の問題は一時少康を得るの結果、機構の改革は却つて、停頓するのではないかと憂ふるものである。よろしく新外相は己れが外務省の外務大臣なりの意識を捨てて、日本の外務大臣なりとの矜恃に立つて日本百年の大計の爲めに、外務省の改革は勿論、機構の改革について盡力せられむ事を祈望に耐えない。

附錄

漫談怠け外務省

外交官が國民から嫌はれるのは彼れ等の耽溺主義、快樂主義にある。それも立派に仕事をやつて、然して後に耽溺するなら、誰れも文句は云はぬが、やる事をやらずに、只ダンス生活を人生の能事としてゐる態度に對して、國民は至大なる反感を抱いてゐるのである。今や外務省の外交を目して『事務外交』『道樂外交』『娯樂外交』『怠け外交』『陸奥の遺產のなし崩し外交』『小村外交の三代息子』等々と罵倒する聲は一部の間では一つの常識になつてゐる。

私がかつて外務省へ行つて某官吏に向つて外務官吏の怠惰を批難したら、彼れは一寸色をなして怒つた樣子をして、辯解之れ勤めた。だが結局、

『飜譯や何かに中々手間がかかる』

と云ふ丈けに過ぎなかつた。彼等は平素登廳しても中々事務を取らず、晝飯に三時間かゝり、午後遲くから漸く事務を取るのが通例で、之を目して『西洋式』と云ふ相である。

本册子は如何に外務官吏が怠惰なるかを一々例を擧げて批難したものだが、併し之は寧ろ『怠

惰』で說明するよりも、親英親蔣主義で說明す可きものであるので、本付錄では特に彼等が事務的に怠惰な事實を一々列擧して見やう。

外務省は此の非常時局にも拘らず、いつでも土曜十二時になると、ピタリと門を閉ぢて了つて訪問者を入れない。陸軍でも海軍でも、隨分遲く迄門を開いて、用人の出入に便してゐるが、外務省は決してそうではない。その爲め、時間外に來た人々にして、裏門から入れる事を知らぬ者は、失望し乍ら歸つて行く。彼等は之を知りぬいてゐ乍ら意に介しない。『外務省の裏門の明いてゐるのを知らぬ樣なものには會ふ必要がない』と思つてゐるらしい。それ故、親切な注意すら門扉に下げて置かない。何か重大な聲明を發した時の午後でも、彼等は十二時には必ず門を閉める事丈けは忘れない。

そうして彼等の內、用のあるものは午後遲くから執務を開始し、用のないものは爭つて家路に歸つて行く。尤も閑散だから歸るなら仕方がないが、此の非常時に閑散なのが不思議である。

但し『離れ小島で、國民から閑却されてゐるからだ』と云へばそれ迄だが、彼等が强いて仕事を閑散にしてゐるのではなからうか。

例へば在野の處士が、極めて重大なる建議の爲めに面會を申込んでも、局長位の連中でも、國

民との面會を避る事夥しい。それ處か取り次いでもくれない。僕は『中華民國承認取消』の運動の爲め外務省には相當足を運んだが、中々局長位でも會つてはくれないのである。屬官なぞが出て來て、

『まあ僕が承つて置きませう』

と云つてどうしても取次いてくれないので、如何に彼等が民間有志の意見を聞く事を嫌つてゐるかゞ判つて、呆れて、終には外務省關係のものを發表しても外務省には屆けない事にして、此方から彼等を對手にしない態度を取るに至つたが廣田外相なぞにも面會は出來そうもなかつた。それ故僕の意見を手紙で二三回通達して置くより外に仕方がなかつた。

之れに反して、外務參與官の熱心なのには敬服した。無名の訪問申込者に對して、彼自身が電話口に出て來て、鄭重に應答して誠意を示す有樣は外務省内での一異彩である。之は一つは自分が政黨出身で『無用の長物』と云はれむ事を恐れての勉强だらうが、政黨も議會では頗る厄介物だが、一人々々斯うやつて各省へ連れてくると、中々味なものだと感心して外務省の參與官へ丈けは敬意を表するに吝かでない。此の參與官を外務省は邪魔者扱ひして冷遇之れ事としてゐる。參與官へはボーイも碌々付けぬ有樣で、誠に御氣の毒だが、昨日は人の身、今日は吾が身にならぬとは誰が保證するか？　陸軍省新聞班の某大佐なぞは多忙の時は椅子の傍へベッドを設けて起き拔けの毛布のトンネルの傍で突然訪問した人物を對手に三十分でも一時間でも議論を上下する丈けの熱意を持つてゐる。外務省の課長局長等にこんな熱意を持つた人がゐるか？

尤も單的に外務官吏の怠惰の判るのは此の非常時が始まつても、外務省の受付や玄關へ行つても、一向に訪問票が供へてなかつた事で判る。訪問者をして其の名と受問者の名と用件と日時を書かせる名票は實に民間の會社や新聞社ではもう二十年も前からやつてゐるが、外務省では遂昨年の十月迄はそれの備へ付けがなかつたのである。餘りに非常識なので、筆者は係のものに注意して至急之れを設く可き事を忠告したのである。非常時日本の外務省、自づから儀禮(?)の府をもつて自任する外務省として餘りに緩怠であると思つて注意したのだが、果せる哉、それから三四週間許り過ぎて行くと、訪問票が出來てゐる。そうして、それ丈けなら好いが今度は訊問の嚴しい事に感心して了つた。然も無名氏でも白人には凡べてが特別に寛大であると云はれてゐる。勿論筆者も忽ちそれに引つかかつて了つた。然もその日は格別誰を訪問すると云ふのではなく、只私の運動の宣傳に出かけたのだが、その爲めか訪問者取調べの煩瑣至極な事は驚く可きで、

『ハハア、始めてなので面白くてならんのだな』

と思つた。漸く受付を突破、中へ入つて役人に

『此の訪問票は僕が建議したのに、然るに建議者の僕をかくの如く取扱ふとは餘りひどいではないですか』

と聞くと、

『それが自縄自縛でせう』

と素見かされたが、果せるかな、十日もすると又元の呑氣さに幾分か逆戻りをする始末であるが、その時、外務官吏の非常識に呆れた事は之の訪問票には訪問者の氏名の傍に年齢(!)を書き入れさせた事である。

世界廣しと云へども、人を訪問するのに年齢迄書かせる處は寡聞にして知らない。朝鮮では名乘り合ふ時、年齢を云ふ事もあるが、それでも玄關で、名刺に年齢を書かせはしない。紀念に此の印刷訪問票を一枚保存して置き度かつたが惜しい事をしたと思ふ。其後、流石に之れ丈けは注意するものがあつたか、間もなく取止めとなり、折角刷りたての用紙何萬枚は皆無駄になつて了つたらしいのである。

こんな調子で、彼等は日本の外交をやつてゐるのだから、失敗許りやつてゐるのであらうか。

もう一つ非常識なのは、應接間に帽子掛けもなければ洋傘を立てかける處もない處が相當ある。昨年の十月頃役人に注意すると、

『何分にもバラックだからそこ迄は間に合はんので』

とある。之れで『西洋式儀禮の府だ』と自任してゐるのだから、好い氣なものである。

昨年十月頃外務省はその表門裏門へ大幟を四本づつ立てた。正面の『和協一心』が愛國團體の間に物議を引き起してゐたが、吾々も之れは不都合だと思ふ。之れは善意に解けば『和衷協同、人心を一にして外敵に當れ』と云ふ意味で、勅語にもある句であるが、あの當時國民は云はれる迄もなく皆火の玉の如く一心和協して戰つてゐたもので、特にああ云ふ幟を出す以上、外務省の日頃の對外平和主義、今日も確持してゐる對英協調主義、蔣政府助命主義、否、廣田外交の標語たる『對外和協讓歩主義』を現して軍部の國家總動員を嘲笑してゐる樣に思ふたがどうだらう。若し然りとせば彈劾す可きものは廣田外相である。

裏門に立てた幟は好く記憶しないが、『忠孝一致』『奮發勉勵』と云ふ樣な對句にも何にもならぬものであつた。調べれば判るが、忘れて了つて、差當つて此處に書けぬのが遺憾だが、兎に角、彼等の書くものは頗る未熟なものがある。之れも注意するものがあつてか、二度目に行つた

時はいくらか對句の體をなしてゐたものであるが、外務省にあれだけの人々がゐて、遂に一人としてかう云ふ事柄を滿足に書けるものが居らず、散々恥辱を風に曝した後で、誰れかに注意されて慌てて直す處は、如何に彼等の精神が弛緩してゐるかゞ判るのである。精神の弛緩許りでなく、日本精神が缺如してゐるから、自己の非常時理想を表現する大幟の文句すら碌々並べられないのである。

『之れで好く廣田外相は揮毫の文句が書けますね』

と云つたら、傍の人が

『なあに、あれは「書家必携名句金言集」から引移すんです。それでなければ矢張り「門前雀羅」なぞと書く組でせう』

と云つたが、果してどうか？たとへ揮毫には『門前雀羅』と書く樣な人物でも、あの國寶的屋敷塀の廻りに霞が關の惡竜から雀羅を張られぬ樣な外相であつて欲しいのである。

門外漢の私にも之だけのアラが判つたが、內部へ入つたら實に疵瑕百出、缺陷千出、恰も『朽木不可釘』と云ふ有樣だらう。

外務省革改論　尾

附錄

親英親蔣派の排斥と

國府否認聲明の檢討

（一）實の否認と親蔣派の暗躍

私は雜誌『大日』正月十五日號所載『國府抹殺を嫌ふ外務當局』なる一文に於いて、國民が我が外務官吏の親英親蔣主義を警戒す可き旨を說いて置いたが、果せる哉、彼れ等及び政府は僅か本論文發表の次の日に鮮かに其の馬脚を現し來つたのである。即ち同月十六日に、有名なる『國府默殺』聲明なるものが發表せられたのである。處が此の聲明の前後の經過を見るに及んで、私には此の聲明に搦んで、政府部內に極めて軟弱不徹底なる側面運動が行はれてゐる事實を想像されたので、吾れ〳〵は更に嚴重に之れを警戒するの必要を叫び度いのである。

今百萬の皇軍は四百餘州の曠野に縱橫に轉戰して、其の尊い碧血を祖國に捧げつゝある。然るに其の交戰の眞最中に國民の意志に反して、吾が政府は密かに獨逸を介して、支那に勸降の申入れをなした爲め、蔣介石氏が

『日本はそんなに和睦し度がつてゐるのか。それなら尙更、和睦は出來ない。』

と云つたとは、某將軍が先般、某演說會に於て公表した事實であるが、併し此の和談の申入れは、本來日本國民の意志ではなく、實に政府を繰つてゐる親英親蔣派の策動たる事は勿論であるが、兎に角、斯う云ふ隱れたる力に半身を占領されてゐる軟弱政府を頂いてゐる吾れ〳〵國民は日支事變の有終の美を全くする爲め、當局者を嚴重に監督して、將來、重ねて日支事變を繰返して、皇軍將士の犧牲を徒勞ならしむる事のなき樣に努力しなくてはならないのである。

又廣田外相が最近議會に於いて發表した講和條件なるものを見るに、夫れは極めて微溫不徹底なもので、之れも亦、國民の納得し得ざる處であるが、密かに行はれた事とて、今更如何とも爲し得ぬが、將來、偃武講和の曉に、こんな調子で『東亞百年の大和平の保障』を要求されては耐らぬ。好く〳〵此の邊の所にも親英親蔣派の動きは重大なものがあるから、國民はよろしく張膽刮目して、彼れ等の蠢動を警戒するは勿論、政府其のものの動きを、此の看點から嚴重に監視し

且つ侃々諤々の爭諫をも遠慮する事なく、何處迄も、之れを鞭撻激勵して行かなくてはならないのである。本來現政府は過去の如何なる政府にも劣らぬ程、國民から信望を集めてゐる。中には現政府に奇妙な態度で諛ふものすらあつて、近衛內閣は如何にも『甘やかされ內閣』の觀があるが、國民が現內閣に對して餘りに監督緩怠に過ぎる事は、決して內閣をして緊張精神をもつて職責を行はしむる所以でないと思ふ。即ち本稿の如き直言が必要なる所以であらう。又もつて親英親蔣派の排斥に資するを得ば大たる仕合せである。

（二）默殺聲明にして否認聲明に非ず

そう云ふ立前から私は今回、兩度に亘つて發表せられたる『國府否認』聲明なるものを仔細に分析して、政府の『國府否認』の行爲が親英親蔣派に制肘されて、如何に動搖不定軟弱不徹底なものであるかを指摘して、軍部國民共同して彼れ等の聲明と其の實行とを將來監督するの資としたいのである。

即ち正月十二日の御前會議の結果として決定せる對支方針に關する政府の聲明は、同月十六日に發表せられたのである。其の聲明に曰く、

『帝國政府は南京攻略後尙ほ支那國民政府の反省に最後の機會を與ふるため今日に及べり。然るに國民政府は帝國の眞意を解せず、漫りに抗戰を策し、內民人塗炭の苦しみを察せず、外東亞全局の和平を顧みる所なし。仍つて帝國政府は爾後、國民政府を對手とせず、帝國と眞に提携するに足る新興支那政權の成立發展を期待し、是と兩國國交を調整して更生新支那の建設に協力せんとす。元より帝國が支那の領土及主權並に在支列國の權益を尊重するの方針には毫もかはる所なし。今や東亞和平に對する帝國の責任愈々重し。政府は國民が此の重大なる任務遂行のため一層の發奮を冀望して止まず』

即ち其の聲明に於いて、『日本政府は國民政府を對手とせず』と聲明してゐる。言頗る簡に失して、恰も多く云ふ事を恐るゝが如くである。夫れなら簡潔雄大、森嚴峻烈、恰も秋官の刑斷を下すが如く明々瞭々であるかと云ふに、決して然らず、頗る曖昧模糊として、云ふは云はざるに勝る程度のものである。むべなるかな、高見之通代議士が『日本新聞』紙上に於いて、之の聲明を批評して、

『無意味に近い』

と云つてゐるが、慥に之れ丈けならば、無意味に近い聲明である。

畏くも　天皇陛下は、皇軍に下し賜はつた御勅語の内に、國民政府を『敵』と仰せられたのである。然らば其の敵を天皇の政府が和平交渉の對手にしない位の程度の事は誠に平凡な事であらう。

結局此の聲明丈けでは、刻下の國府否認熱沸騰の民衆から『無意味』に近い聲明なぞと嘲られても仕方のないものである。若し之れにしも、重大な意味ありと假定せば、それは國民政府を『敵』として扱ふ處の日本國民の大意志に沿はない處のものと考へる場合より外はあり得ないのである。又不幸にして、それが事實の眞相に觸れてゐる見方なりと信ずるものであるが、若し然りとせば、此の無意味に近い聲明は刻下の日本にとつて『極めて、意味重大なり』と云はねばならぬのである。以下私が執拗に此の聲明を檢討する理由は實に重大なる意味と運動が隱藏されてゐるのを悟つたからである。

（三）『對手とせず』の語義

抑々『對手にせず』と云ふ意味は少くも『沒交渉』の義である。中華民國の主權政府とは何等交渉もないと云ふ意味である。つまり『斷交』の義である。

さうなると、『承認以前』に立歸る事にもなると思ふものもあらう。即ち今日英米は滿洲國を承認してゐないが、之れは滿洲國を對手にしないと云ふのである。然し此の方ではまだ未承認であるから、同じ『對手にせず』でも一寸違ふ處もある。即ち今度の『對手とせず』は、『未承認』の『對手にせず』ではなく、寧ろ此の點は『斷交』に近いものであらう。

之れより外に解釋のし樣はない。だが、現內閣が『對手にせず』なる珍語を發明して使用したのであるから、何か獨自の見解があるかも知れぬ。即ち廣田外相は

『之れは前例のない言葉で今日は前例のない手段を必要とする』

と傲語してゐるので、何か立派な新解釋があるかも知れぬが、筆者には廣田外相の腹の中迄は判らない。若し判つたとすれば案外つまらない空虛な觀念ではなからうか。勿論十八日の政府の苦しい解釋は之の『對手にせず』の說明として行はれたものであるが、之れは便宜上の解釋で、誰れも『對手にせず』にあんな解釋が有り得ると思ふものはゐない。

若しさう云ふ合理的な新解釋が立ち得ないとすると、彼れ等は何が故に『斷交』と云ふ立派な表現があるのに、斯くの如き新語を發明する必要があつたか其の動機を疑はれるのである。

私としては、彼れ等は『否認』の語を用ふるのが嫌でならぬが、周圍から強要されて、餘儀なく、斯くの如き前例のない曖昧な表現を用ひたものだと考へ度いのである。否認主義者を滿足させ乍ら、彼れ等に肩透しを食はせたり、煙に捲く爲めに、あんな曖昧な珍語を使用したのだと認定するのである。

私のさう云ふ解釋が無理でない證據として、彼れ等が此の十六日の聲明以前に、否認運動に對處するものとして、絶えず、『國民政府の事實上の否認』『否認の示唆』或は『暗默の否認』等をやつて、軍部の要求する樣な所謂否認は決してやらないと云ふ事を放送してゐた事實を指摘し度い。實際之れによつて『對手としない』と云ふ言葉の意味が、『否認』よりも弱いものであつた事が明白に看取されるのである。即ち『實質上の否認』をすると云ふのは結局『名義上の否認はしない』と云ふ事であるが、『否認』と云ふ大義名分的行爲に於いては名義上の否認が大切で事實上の否認は第二義である。云ひ代へれば名義上の否認が本當の否認で、實質上の否認こそインチキな否認なのである。即ち、『否認の示唆』や『暗默の否認』の如きは皆インチキな否認なのである。

（四） 默殺聲明は實は『承認の繼續』を現す

夫れ所か、此の聲明には

『承認の繼續』

なる思想が現れてゐる。少くも十六日のあの當時、即ち十八日の再聲明前迄はそれが現れて居たのである。即ち

『國民政府は依然として元の儘存在してゐるが、將來日本は之れを對手としない。對手にならない。外交的には彼れに一指も觸れない』

と云ふ思想が豫想されたのである。

之れを見ると國民の否認熱沸騰の眞最中に、强て斯くの如き苦しい無前例の言葉を案出した處に、親英親蔣派たる外務當局の援蔣主義の苦心が現れてゐると私は見做すものである。

それでなくば、なぜ素直に「否認」なる言葉を用いないのか。斯くも國民を擧げて國府打倒、國府抹殺の爲めに戰ひつゝある時に『否認』の手段を避けて『對手とせず』と强ひて云はねばならぬ必要が何處にあるか？　此の理想的な言葉を拒んで、强ひて、斯くの如き言葉を用いた理由

の公開を私は內閣當局に要求し度い位であるが、若し、滿足な理由が聞かれないとするならば、吾れ〳〵はどうしても、之れを政府が援蔣的外務當局や、親英勢力に制肘されて、斯くの如き微溫的な言葉を用ひたのだとなすものである。

誠に斯くの如き聲明は否認主義者に對して許す事の出來ない不信不實の行爲でさへある。

（五） 新聞の粗忽な解釋

十六日の國府默殺聲明の報道に關しては、凡べて都下の新聞は極めて迂濶千萬で、只々新聞記者が外務省の放送を聞いて、それを再放送する丈けに止まつてゐた。即ち發表された十六日の聲明を見ても、之れを漫然『否認』聲明として扱つて、何等怪しまぬ程の呑氣振りであつた。例へば一月二十日の『東京日日新聞』の『餘錄』に曰く、

『國民政府を對手とせず』といふ聲明を國民は別にわからんとは思はなかつた。しかし誰かゞ、わからんといひ出せば、成程わかつたやうでわからんところもあつた。

何でも風見書記官長の起草したものを時節柄植木師のやうに多くの人々が手入をして、あんな聲明になつてしまつたと聞くが、政府もわからんといはれて見ると、やはりさう思つたらしく補足する所があつた』

と云ふ樣な甘い見方である。即ち餘錄子は

『政府は聲明が曖昧だと云ふ世評に促されて再聲明をやつたのだ』

と解釋してゐるが、之れは新聞記者として御目出度い限りで、『對手にせず』と云ふ政府の聲明は親英派が練りに練り、考へに考へて作つた言葉で、此の一語で此の難局を切り拔けやうと云ふのが彼れ等の本心であつたのである。若し彼れ等に虛心平氣、正を踏むで恐れざる底の大精神があれば、此の一句丈けで、

『讀むで字の如し』

と濟まして居られるのである。自他とも、文字から正しく演繹される處に忠實である精神ならば『わからぬ』處もなければ、曖昧な處もないのである。只口と腹と事實とがそれ〳〵違ふから、そこで曖昧になつて來るのである。

（六） 抗議に狼狽して再聲明を發す

果せるかな、之れでは軍部や否認運動者が收まらない。忽ち重且つ大なる横槍が出て來たらしい。之れは私が誰れから聞いたわけでもない。單なる私の天眼通であるから誤解のない樣に願ひ度い。

本來軍部の要請に基いて『否認聲明を出す出す』と云ひ乍ら、出して見たら前述の如きインチキ極まる贋物である。否認處か肯定である。單なる一時的斷交聲明である。それでも好くしたもので粗忽な新聞は皆一杯食はされた形で無雜作に『否認聲明』として扱つてゐた。元々否認聲明をすると云ふ先觸れだから、天下は之れを否認聲明として扱つてゐたのは當然であるが、此の虚僞を洞觀したものには之れでは改まらない。忽ち有力なる筋から政府に痛烈なる抗議が出て來たらしい。

そこで狼狽した親英派と親蔣派は此の抗議を慰撫する爲めか、慌て捲くつて、十八日の增補聲明と云ふ醜態千萬な珍劇の實演となつたと云ふのが、筆者の第六感に映じた經過で決して其の筋から聞いて來たわけではない。兎も角之れが所謂『否認以上』なる滑稽な再聲明である。即ち此の聲明を下に引用して見る。但し此の一月十九日『東京日々』の發表に左の附屬文が伴つてゐるのでそれと共に引用する。

『政府は南京攻略後に於いて抗日蔣介石政權が依然として反省せざるに鑑み去る十六日帝國政府として遂に最後的重大聲明を發表して蔣介石政權を默殺するところあり、これによつて東亞永遠の平和を樹立しもつて今次事變終局の目的達成の爲め帝國政府不退轉の決意を中外に闡明したが、同聲明中「帝國政府は爾後國民政府を對手とせず」との字句につき世間往々にして對手とせずの眞意如何を論ぜされ、誤解を生ずる恐れありとなし十八日の定例閣議に於いて政府の意向を明示すべしとの事に意見の一致を見た、依つて閣議散會後風見書記官長は右の趣旨を敷衍して左の如く表明した。』

とあつて、聲明の本文は左の如くである。

『國民政府を對手とせずとは國民政府否認よりも强硬なる意義を有するものである。何となれば今後國民政府を承認するが如きことは絶對にあり得ず容共抗日政策を以つて東亞の平和を攪亂する反日蔣政權を斷乎擊滅粉碎するの意義を明示するものにして、一面宣戦布告とは支那の國家國民を對手としてはじめて成立するものであるが、蔣政權は既に支那の國家國民より完全に離脱したる一地方政權である。從つて相手とせずとは承認せざる點に於いては蔣政權に對する否認乃至宣戦布告よりも强硬なる帝國政府の斷乎たる決意を明示するものである。』

（七）『對手とせず』の實體

兎に角本稿では、此の聲明の缺陷を仔細に分析して、其の『インチキ否認』の實體を究明して將來の警戒に資すると共に、聲明其のものが如何に低能未熟なものなるかを指摘して、政府の反省自肅を要求し、將來再び斯くの如き醜態を繰返して、國耻を世界に曝す事勿らん事を注意し度いのである。一般に現内閣は近衞首相の信用の陰に惰眠を貪つてゐると云ふのが定評であるが、それなら尙更我々は之れを嚴重に批判して一つの警策とし度いのである。議論の煩瑣な點は御許しを願ひ度い。

即ち、十八日の再聲明に依ると『對手とせず』とは『國民政府否認よりも强硬なる意義を有す』る由であるが、本來言葉の上では『對手とせず』と云ふのが『否認』より强い意志を有するなぞとは全く有り得ざる事である。乃で强い意志を遲れ走せ乍ら十八日の定例閣議で追加せざるを得なくなつたと云ふのが眞相らしく、之れは遲蒔乍ら大慶千萬ではあるが、國民は此の樣な不見識な振舞をする當局者と、其の背後の親英主義者、親蔣主義者とを嚴重に監視する必要があると共に、十八日の定例閣議を强制して、斯くも强い聲明を發せしめた大きい力に吾れ〳〵は滿腔の感謝の情を捧げるものである。

（八）再聲明こそは國府否認聲明也

再聲明に於いては『今後國民政府を承認するが如き事は絶對に有り得ず』と云つてあるので、此の言葉によつて、吾れ〳〵は始めて間接乍ら國民政府が否認された事を了承するのである。又此の語によつて政府が否認主義者に一札入れた事になるので、尤も重大な一句である。

十八日の聲明によると『對手にせず』と云ふ言葉の中に『蔣政權を斷乎擊滅粉碎の意志を明示するものである』と云つてゐるが、之れはそんなものがあつたのではなく、結局滑稽な程に詭辯的であつて、如何にも苦しい說明である。始めから夫れ程の決心があつたなら素直に『否認』『抹殺』と云ふ言葉を使用すれば好いのに、再聲明をさせた强い力とは正反對の柔かい暗い力に苟合して『對手にせず』で御茶を濁さうとして、夫れが出來ずに、澁々强硬聲明を後から追加せざるを得なくなつた上に、始めから夫れが『明示してある』と頑張る處は頗る滑稽千萬である。即ち其の再聲明に於いては

『對手とせずとは、（略）承認せざる點に於いては蔣政權に對する否認よりも强硬なる帝國政府の斷乎たる

決意を明示するものである』

なる個所の前後は頗る可怪しい。讀めば讀む程奇妙である。即ち聲明の趣意から云ふと

『對手とせず』なる言葉には再承認の意志が含まれてゐないから、即ち『否認以上』である。

と云ふ事に簡潔化されるが、さうなると、『否認』なる概念には本來『再承認』の意志が內在してゐるかの樣である。

が、之れが大間違である。『否定』、『否認』、『抹殺』等の言葉は重大なる敵意表明で、敵に聲明に依る致命傷を與へる事を意味する。そこには再承認の內容なぞは絕對にない。即ち、否定や否認によつて日本から見て一反は國民政府が無となるからである。處が之れに反して『對手とせず』こそは前述せる如く『對象の存在繼續』を意味する。『承認の繼續』を意味する。即ち『對手とせず』にこそ、其の觀念に『再承認』處か、『承認』なる內容が含まれてゐる。又十六日の聲明ではさう云ふ親英親蔣的な不都合な下心があつたに相違ないのである。即ち『對手とせず』こそ『否認以下』である。之れを『否認以上』と言ひ張る彼れ等の頭腦と良心とは相當疑はれて好からう。

誠に機會だにあらば、又否認主義者が少しでも監督を弛めれば必ず『十八日聲明』は、いつでも『十六日聲明』に逆戻りの危險があるのである。私が國民に

『警戒せよ』

と叫ぶのは玆である。

（付記）私は雜誌『時局と人物』の當年三月號に右の如く書いたが、豫言に違はず、政府は十八日の聲明を閑却して漸次に十六日の聲明を生かさむとしつゝあるやに見える。消息通の噂では十六日の聲明に於いて外務省は『國民政府を新政府に妥協せしむる餘地を殘したのだ』と云はれる。實際それに相違ないのである。

（九）御前會議と兩聲明との關係

然も此の十六日十八日の兩聲明なるものは十一日の御前會議に基いてなされたものである。そこで、御前會議を經てなされた聲明に、如何にして、斯くの如き、或は下述の如き混亂紛淆が起つたか。若し十八日の聲明が正しいとすれば如何にして十六日の失錯聲明を爲すの結果となつたか。御前會議の後に大本營に於いて、內閣との連絡會議が開かれて、再檢討迄せられた聲明文の本體は何處にあつたか、之れ等を理論的に究明する事は頗る重大なる冷嚴なる結果を招く事を

恐れるので、時節柄、筆者は之れ以上は絶對に觸れない。即ち內閣に大な災を及ぼしては困るからである。が、併し國民は此の邊の所も注意熟慮の上、飽く迄將來を警戒せられむ事を祈望するのである。

前述の缺陷も、若し之れが御前會議の如き神聖重大なるものでなかつたなら、再聲明なぞと云ふ拙策を延期させて、少くも三週間位間を置いて、ほとぼりの醒めた時分に別の聲明を出させると云つた活き手があるのである。眞逆否認主義者も三週間位待てぬわけでもなからう。さうやつて三週間計りたつてから左の樣に云へば立派なものである。

『去る十六日帝國政府は國民政府を對手にせずと聲明したが、あれは國民政府承認の單なる中止であつて、あの聲明の結果として、彼我斷交の狀態にあつたが、其の間、彼れ等の樣子を注視してゐたが、依然として反省の風が見えぬから、今度は更めて帝國政府は積極的に國民政府を否定し抹殺する』

と聲明すれば、何の事もないのである。夫れ處か、內閣の失錯を立派に償つて餘りがあるのである。之れ丈けの芝居が打てないのは、問題が御前會議であつて、小芝居をやる丈けの餘地がないからである。

（一〇）大失錯を大成功に轉ずる活策

だが、更に面白い方法がある。此の失錯聲明を理想的方法として活かす道がある。

即ち日本はまだ『九ケ國條約』の拘束を受けてゐる。破棄せぬ限りは、此の條約を遵奉しなくてはならない。即ち其の條約から照らし見る時は、支那の國家や政府を否定し抹殺する行爲は條約違反なのである。只消極的に承認を取消して、單に承認から退却する丈けの事しか許されて居ないのである。夫れ故『九ケ國條約』を意識する限りは『對手にせず』なる聲明は實に條約に忠實なる聲明である。若しさう云ふ自覺からされた『對手にせず』なら私は今迄私が主張し來つた立前からしても、全く贊成せざるを得ない聲明なのである。

但し條件がある。其の代り直ぐに矢繼早やに政府は左の如き聲明をするのである。即ち

『吾が政府は本日國民政府を對手とせずと聲明した。之れは主權政府承認の撤廢を意味するもので、從つて日本の見る處では支那は其の主權政府の存在を失つたによつて、同時に舊中華民國は日本政府より見て滅亡同然たるにより「九ケ國條約」は今日限り日本の關する限り空文に歸せるによりよろしく御了解を得たい』

と關係八ケ國へ通牒を出すが好い。夫れは同條約は『中華民國の統一主權の存在を基礎とし、要想として締結せられたもので、中華民國がなくなれば、此の條約は自然現象として立消えになるのである。夫れ故吾れ〳〵は『對手とせず』と云ふ丈けの消極聲明で『九ケ國條約』を强ひて破棄する必要なしに、自然に廢棄出來るのである。然も何等此の條約に矛盾しないから妙である。

さうして十八日になつて積極的に痛烈なる中華民國抹殺、夫れが御嫌なら國民政府抹殺でも虐殺でもよいから、勝手な聲明が出せるのである。之は右の條約を破棄せねば出來ぬのである。

『日本政府は十六日國民政府を對手にせずとの聲明を發し之れによつて、承認取消の意を示し、更に十七日に日本の關する限り「九ケ國條約」解消の旨を通告したが、玆に於いて、帝國政府は支那に對する自由の立場に立つて中華民國（或は國民政府）の主權と領土權を積極的に否認し抹殺するものである云々』

と聲明したらどうなる？　**十六日の骨拔聲明は寧ろ失錯ではなくて、實は冴へ返つた外交の技術を表現した事になり、十七日の『九ケ國條約』破棄、十八日の積極否認聲明と相俟つて光彩陸離たる三段外交の妙味を發揮出來るのである。**此の方法は已に昨年九月私は民國否認の檄文に於いて發表して置いたのである。若し彼れ等が民間有志の說を謙虛な態度で聞き入れる丈けの度量があれば、有志はいつでも彼れ等の失錯を救ふ丈けの知慧を貸してやるのに、下らぬ所で無駄な時間は浪費する辯に、有志との面會を極度に忌避する不誠意千萬な心掛だから、斯う云ふ時に取返しのつかない醜態を繰返すのだなぞと云ふものがある。

（一一）領土主權を蹂躙し乍ら、夫れを尊重出來るか？

第一聲明にはも一つ拙い處がある。之は起草者風見君や外交官等の責任である。即ち之れには『元より帝國が支那の領土及び主權並に列國の權益を尊重するの方針には毫も變る所なし』とあるが、之れも頗る可怪しい。

日本は今、百萬の精兵を支那の領土內へ送つて、其の廣大なる土地を占領し、支那の主權を奧地に放逐してゐるではないか。之れは明かに支那の主權と領土權を蹂躙してゐるので、其の眞最中に『主權尊重』と云ふ樣な事を云ふ必要が何處にあるか。斯う云ふ矛盾的な事を云ふから、列國から、

『不信不義の日本人』

なぞと云はれるのではなからうか。之れでは書記官長は完全に落第である。

更に玆では『支那の領土權』と云はなければ日本文としては一寸可笑しいが、恐らく之れは強い力に威かされて狼狽して、小細工に急しかつたので、見落したのだらう。

尤も斯う云ふ正確な日本的文章を書けと云ふのは彼れや、日本の外交官には無理な注文かもしれぬ。

（一二）『對手とせず』は『消極斷交』の義也

夫れから可笑しいのは『國民政府を對手とせず』と云ふ事は同一文章中の『支那の主權尊重』の立前から解釋すべきであるが、若しさうなると、之れは『謙虛なる消極的退却斷交』と云ふ意味より外に、解釋出來ないのである。そうして又之れが正解であらう。それに新聞に長い前から外務省の意志として豫言された處と照合しても『消極的斷交』と說く可きである。決して此の聲明はそれの偶合ではないのである。

處が十八日の定例閣議の聲明によると、此の『對手とせず』は消極斷交所か『否認』或は『夫れ以上』の意味だ相である。さうなると

『支那の主權政府を否認、或は「夫れ以上に否認」し乍ら、主權を尊重する』

と云ふ結果になるが、之れでは起草者の頭が餘つ程狂つてゐると云はねばならぬ。強い處から横槍を食つて面食つてこんな失錯をやつたのである。

兎に角、理論的には十八日の聲明は十六日の聲明を補足したのではなくて、變改したもの、即ち十六日の聲明は事實上否定されたと見る可きである。

（一三）『否認以上』とは何か？

『否認以上』と云ふ語も珍語である。素人臭いとぼけた言葉である。之れは強い横槍に迎合する爲めに『否認以上』と云ふ誇張語を用ひたのである。が、然し『否認以上』とは一體何だ。外交的聲明に於いて、『否認以上』とは抑々何を指すだらう。

考へて見ても何も搜せはせぬ。例へば『抹殺』があるが、之れは『否認』を詩的に形容したのに過ぎない。そこで『否認以上』の內容を其の聲明に求めて見るに、『今後國民政府を再承認する事はあり得ぬ』と云ふ事が『對手とせず』の一內容だ相だが、併し之れは無理である。何となれ

ば『否定』『否認』にこそ、さう云ふ内容は矛盾的で許せないが、『對手とせず』には、明日からでも『對手とする』大可能性があり、又さう云ふ對蔣馴合を恐れたからこそ、強い横槍が出たのである。假りに『對手とせず』に『再承認を許さぬ』と云ふ觀念が含まれてゐると假定すれば、正しく『否定』や『否認』と同等であり、決して『以上』ではない。

又十六日聲明の中には『蔣政權を斷乎擊滅するの意義を明示』してあると云ふが、『對手にせず』の中には、そんな事は『暗示』されてもゐない。寧ろ『否定』と云ふ概念の中にこそは、さう云ふ大意志が明示されない迄も暗示されて居るが、『對手にしない』の中には暗示すらもされて居ない。夫れ處か、否認熱沸騰の眞只中で、敢然捻出された『對手にしない』には『近日握手』の對蔣馴合が豫想されさへする。慥に落花流水の趣を暗示すると思ふのは、國民に内密に獨逸を介して、國民政府に降參を勸めたと議會で聲明してゐる帝國政府に對して、必しも無理な邪推ではあるまい。

兎に角、萬々、右の『擊滅』の項が暗示されたと假定しても、之れも矢張り『否認以上』ではない。『否認や抹殺と同一同格』である。

（一四）宣戰に關する認識不足

『宣戰布告とは支那の國家國民を對手として始めて成立する』

の『支那の』は贅語であるが、此の中にはそんな小さい事よりも頗る大きな認識不足を包藏してゐる。

本來宣戰なるものは　天皇の大權であつて、其の宣戰の對手が國家と國民の形態を爲してゐると否とは問ふ處でない。國家國民の形態を爲さぬ匪賊や、地方政權に宣戰せられたとて、差閊へはないのである。それ故此の引用句は間違である。

但し其の樣な宣戰は體裁が惡いから、私は私の新著『支那を如何にす可きか』に於いて、地方政權に宣戰せらるゝ場合は寧ろ『匪賊征討』なる形式をもつて中外に宣言を發せらるゝがよからむと述べて置いた。之れは宣戰の新形式ではあるが、兎に角、之れも國際法上、宣戰である。

但し、之れは國家承認の取消を前驅せなくては行はれぬ事は勿論である。

勿論蔣政權は事實に於いて、今迄の所謂中華民國の實はない。それ故中華民國の國家承認の取

消ならば出來る。然し夫れをせぬ以上、今でも合法的な立派な中華民國ではある。又今でも揚子江上流、兩廣から陝西迄廣大なる領土の事實的主權政府であつて、國民黨の國家を爲して居る。夫れ故宣戰布告をする價値は充分ある。處が吾が政府聲明では夫れが出來ないと云ふのである。即ち十二頁に紹介した此の拙文的晦澁聲明を簡潔に書き直すと、

『宣戰布告は國家國民を對手としてのみ可能なのに、蔣政權は支那の國家國民より完全に離脱した地方政權だから、宣戰布告は出來ない』

と云ふ思想を表現してゐる。之れは私計りの曲解曲讀ではない。多くの者が、同一の解釋をしてゐる。即ち一月二十二日の衆議院本會議に於ける堤康次郎氏の質問に於いて同氏は風見書記官長の右の談話を引用して、

『蔣政權が支那の國家國民から遊離した地方政權となつたと明言されると宣戰布告が出來ないと云ふやうな印象が與へられるが政府は國際法的にどう考へてゐるのか』

と云つてゐるのでも判る。

それは兎に角蔣政權は支那全體から見れば地方政權でも、又『中華民國』の實はなくても、まだ宏大な領土を持てる國家的なものである。宣戰の出來ぬわけはないのだ。

更に此の聲明文は色々の曲折はあるが

『宣戰布告が出來ないから夫れ以上の手段なる處の「對手にしない」と云ふ處置をとるのだ。之れこそ否認以上宣戰以上である』

と云ふ思想を表示してゐる。

だが、『宣戰布告が出來ないから』とて『對手にしない』と云ふ思想は國民には受付け得られぬ獨り好がりの思想である。否、不合理の思想である。宣戰が出來ぬ迚それに代る可き色々の處置があるのである。

又、本文の最後を見ると、一番終に始めて、『否認以上』なる言葉の內容を搜し當てる事が出來る。即ち對手にしないのは宣戰が出來ないから、夫れ以上の態度として對手にしないので、之れ『否認以上』であると云ふのであるらしい。だが、之れも下らぬ考へ方である。或は『對手にしない』と云ふ事が『否認以上』だと云ふ事は禪問答なぞにのみ許される表現である。或は紳士間の付合上に云はれる事である。或は殿樣が下郎を手討にすべきだが刀の穢れだから、土芥の如く捨てゝ了ふと云ふのは斬り捨てる以上の侮辱ではあるが一面に於ては下郎を助けやうとする恩惠的處置で、現政府の獸殺聲明も正しくそう云ふ恩惠的處置なりと見做す餘地が充分にあるのである。

（一五）風見聲明と首相の宣戰聲明との矛盾

又此の聲明にとつては困つた事に、一月廿日の議會で近衛首相は、

『場合によつては宣戰の奏請をする』

と云つて居る。即ち二月三日の衆議院豫算總會に於ける由谷義治代議士の質問

『首相は將政權の勢力が擴大した場合や、或は時局の推移によつては、將政權に對して宣戰布告をなすかも知れないと言明してゐる、宣戰布告を豫想する以上それと裏表の關係にある講和談判の相手とする場合も豫想出來るのではないか、また第三國介入の場合も豫想出來るのではないか、』

に答へて、首相は

『將政權を相手にせずといつた意味は國交調整の相手にしないといふ意味であるから、宣戰布告をなすことがあつても和平交渉の相手とすることはない。』

と明言してゐる。之れによつて十八日の聲明は宣戰に關しては間違なのが判る。又其の結果として『否認以上』の『以上』なる點は內容を持つてゐないのが判る。

要するに彼れ、或は彼れ等は只行き當りバツタリに斯う云ふ矛盾だらけの與太聲明を發したので、どうして斯くも重大な宣戰問題に於いて、こんな矛盾的行爲を敢へてするか？

（一六）『對手とせず』は膺懲聲明を忘れたもの

『對手とせず』の聲明を或る新聞は『默殺聲明だ』と書いたが、當つてゐる。又政府も十八日の聲明に於いて『默殺の事だ』としてゐる。兎に角、『對手とせず』と言ふ言葉の中には積極消極共に國民政府に實害を與へぬと云ふ意味が含まれてゐる。處が斯くの如く『對手とせず』と云ふ外交史上に於ける新語を發明したので、重大な點、即ち今迄の膺懲聲明に關する顧慮を失念して了つた結果、

『夫れなら戰爭の對手にもしないのか』

と云ふ笹槍が突出された。さうしたものだから十八日の聲明には、

『十六日の聲明の中で斷乎として擊滅粉碎するの意義を明示した』

と云つてゐる。處が同聲明には寸毫も明示してゐないからこそ、之れ丈けの槍が出たのだが、此

の邊の矛盾は中學生にも判る樣な缺陷である。その上珍語を發明した御蔭で、一番大切な

「戰爭をどうするか」

と云ふ關係の考慮迄は行屆かなかつた結果として、斯樣な缺陷が現れたのであるが、此の失錯も小なりとしない。若し素直に『否定』と云ふ積極表現を用ひれば膺懲と戰爭に關する事は云はなくても『明示してある』と云へるが、『對手にしない』のでは、戰爭の事を云はなくては不具の聲明となる。然も暗示すらしない事を『明示した、明示した』と頑張る處なぞは苟も政府の聲明として天下に信を繫ぐ所以ではあるまいと思ふ。いくら『明示、明示』と盛んに連發して見ても、元々『對手とせず』の中に、少しも明示してゐないからこそ再聲明となつたので、若し明示されてゐれば『誤解を生ずる恐れ』なぞある筈もない。特に明示を避けて否認問題を闇から闇へ葬らうと企てゝ葬り損つたので、『明示した』と何度も〳〵斷つて横槍氏を滿足させやうと狼狽して大汗になつてゐる處は風見君も案外可愛いゝ處がある。

（一七）國家を離れて政府を對手には出來ぬ

又議會では

『外交的に對手にしないので、戰爭の相手にはする』

と云つてゐるが、十六日の聲明は外務省の聲明ではなくて、政府の聲明であるから、其の聲明は決して外交的意味にのみ局限さるべきではないのである。且つ又、輕卒にも、あの一月七日に

『蔣政府も和平意向漸く顯著なるものの如くである』

と云ふ重大なる聲明を發表して、軍民に和平近しの錯覺を起さして、國民の心を一時弛緩させた揚句であるので、尙の事『對手にせず』が頗る非軍事行動的感じ、即ち『戰爭の對手にもしない』と云ふ樣な感じを與へたわけである。

又再聲明の文面では

『支那の國家を敵とせず、國家より離脫した蔣政權のみを敵とする』

と云ふ樣だが、成程之れは日本全體の心組みではあるが、內閣の堂々たる聲明は文學や藝術では

ないから、氣持を其の儘文句にして、法理を無視されては、百世に笑を殘すものである。

抑々現在に於いて、中華民國と國民政府は不可分である。法理上同一のものである。國民政府を措いて中華民國は存在しないのである。北支の中華民國はまだ認められてゐないし、別個の獨立中華民國である。夫れ故、舊中華民國を攻擊せず、國民政府のみを叩きつけると云ふのは可怪しい。又國家は對手とするが、蔣政權は對手としないと云ふのも可笑しい。蔣政權を對手としてゐる時は即ち必然的に舊中華民國を對手にしてゐる時で、其の反對も亦然りだ。

誠にこんな粗雜な態度で大國の聲明を起草されては耐らない。又如何に風見君の頭腦が粗末であるかゞ判る。切に內閣諸公の反省を求め度いのである。

（十八）十八日の聲明は軟弱政府の悲鳴

缺陷は其の次ぎにもある。

『蔣政權は既に、支那の國家國民より離脫せる一地方政權である』

と云ひ放してあるが、之れ丈けの云ひ放しは內閣聲明には許されない言葉である。本來日本は中華民國を正式に承認してゐる。其の承認國家の中央主權政府が其の國家より離脫したとしたら、國家はどうなるか？　日本が中華民國に對して行つた過去の國家承認行爲は一體どうするのか？若し日本が蔣政權に對してさう云ふ大診斷を加へるなら、更に夫れに伴ふ對中華民國の國家診斷と、夫れに對する日本政府の態度を表明しなくては許されない處の聲明である。之れ恰も堂々たる醫師が自分の新患者を見て、

『之の患者は咳をする』

と云つてケロリとして何の處置處方を與へないのに等しい。

乃で我が當局も之れに付隨した國家の診斷及び處方として、

『從つて中華民國は崩壞した。主權政府は消失した。日本は其の國家承認を取消す。日本は支那全土に自由行動を取る』

と云ふ事を付加するなら、右の聲明は何の不都合もない。處がさう云ふ認識は勿論、意志も覺悟もない爲め、堂々たる大國家が、斯くの如き重大認定を聲明し乍ら、其の聲明から結果せる最重大なる問題に對する態度表明の大責任を忘れて、徒らに低能兒の如く下らぬ事を云つてゐるに至つては、書記官長の頭腦の健在を疑はざるを得ないのである。苟も非常時日本の大翰長はもう少

し練達堪能の士でなくては、今回の如き世界的聲明を發する場合には、忽ち國家の威信を傷けるのである。

之れを要するに、軟弱當局が否認主義の輿論に抗し切れず、滋々乍ら、『否認の假面を被つた』微溫的默殺の聲明を發しては見たが、直ぐに否認主義者に咽喉首を摑まへられて、餘儀なく苦しゝ紛れに發した悲鳴的言譯が、即ち十八日の聲明で、親英派の悲鳴的泣言だからこそ、斯くも前代未聞の缺陷百出、箸にも棒にも懸からぬ襤褸聲明となつたので、其の恥辱は書記官長獨りが負ふ可きものではない。恐らく、强硬末次內相や軍部兩相以外の軟弱閣僚全部が負ふ可きもので、外國人なぞに見られても、正月七日に發した『蔣介石は和平兆候を現して來た』の錯覺聲明と合して、此の三つの大聲明は日本の威信を傷くるものが大きいので、返す〳〵も遺憾千萬の次第である。

夫れから以下の聲明の文章はウッカリ讀むとよく判るが、熱心に讀むと益々判らなくなる寢言に等しき珍文で、只好く判るのは起草者の周章狼狽振りが手に取る如く見ゆる事で、日本始まつて以來、政府の發した聲明で、こんな拙劣蕪雜なものを見た事がない。讀めば讀む程意味の判らぬもので、讀者はよろしく笑ひの種に、或は後學の爲めに繰返して讀んで見られるが好からう。私の云ふ事が誇張でない證據に噴飯的粗忽を指摘すれば、堂々たる聲明の中で、『國民政府』と云つたり『蔣政府』と云つたり用語のシドロモドロな點すらあるのである。その位だから最後の一節『政府は國民が』の一項にも厄介な文法上の誤があるとは他の雜誌が既に指摘した處で併せて引用さして貰ふ。尙起草者の日本的精神の缺如をも批難してゐるので、その點も讀者に傳へる價値があるので、序に引用しやう。

即ち雜誌『大日』一六八號所載『中外時事』の『政府の聲明を評す』の項に曰く、

『殊に結語たる「政府は國民が」云々の一節に文法上の誤謬あるは、國民をして「一層の發奮」を爲さんとするも能はざらしむ。此の種の文法上の誤謬は近衞內閣の曩日の聲明にも現れたる所にして、是れ文案起草者及び採擇者が國語を尊重せざるの證左なり。國語を尊重せざるは、其の思想の根柢が西洋文化に存し、從つて、日本精神に徹底せざることを意味す。此の一點より推せば、聲明全文中に民族的信念を看取することは能はざるは當然にして、閣僚中今次聖戰の意義を諒解する者果して幾人ありやを疑はしむ。思ふて玆に至れば衷心の不安禁ぜんと欲して禁ずる能はざるなり』

右引用の『文法上の謬』とは恐らく、『此の重大なる任務遂行の爲め』が、誰れの行爲だか判らぬ所を云つたものであらう。若し然りとすれば

『政府は吾等の此の重大なる任務遂行に對して國民が一層の支援を吝む勿らん事を冀望して止まず』

と云へば、文義は明瞭となるのである。

（一九）風見書記官長辭職す可し

内閣の聲明は風見君が執筆するのであるが、彼れが書記官長になつた時に、窓框へ泥靴をのせて寫眞にとらして、幼稚な衒氣タップリな野人振りを示して、心あるものをして苦笑せしめたが、夫れでも書記官長の仕事を立派にやつてのければ、之の泥靴芝居も見直す餘地があるが、之の二度の聲明の非常識な有樣で、彼れが書記官長の職にも堪へない不器用未熟な人間なのを暴露してゐるのは氣の毒でもある。

だが事は小風見の個人的問題ではない。日本が世界に發する大聲明の問題である。吾々は決して之れを臭い物蓋主義に不問に付してはならぬ。大事にならぬ限度に多少の處置は必要である。

本來風見君は自由主義者である。新聞によつては彼れを『赤い』なぞと書くものもある。兎に角、彼れの思想が軍部や非常時國民一般と緣遠いものがあるのは事實だらう。其の樣な精神狀態

の彼れが内閣に於いて親英派親蔣派に近緣を牽く事は極めて明白な事實で、今度の聲明に於いても、彼れは内閣の大番頭として、單に夫れを起草したと云ふ丈けの役割をしてはゐないのである。寧ろ彼れ自身が親英派、少くも、俄親英派として有力なる役割を果してゐるのである。誠に彼れの實力と精神傾向の關係する處も可成大きいのである。

夫れ故戰時内閣改造には彼れも當然退却せしむべき代物である。又、其の爲めと云ふ程の事もないが、以上此の聲明の檢討は結局彼れのメンタル・テストにもなつてゐると云へやう。誠に内閣改造の一資料として、本稿をば彼れの腦力の評價の參考とする事は必しも無用ではあるまい。此處で風見君の爲めに計るにどうせ政府聲明の遣り直しなぞと云ふ事件が起つた以上は、色々沙上偶語の起らぬ内に、一切の責を自分獨で背負込んで、綺麗な犧牲的退却をして元の野人に歸ると云ふ男らしい活手段を取る可きではなからうか。『君子は身を殺して仁を爲す』と云ふ言葉は永久の眞理である。兎に角、風見君が、斯う無能では、遂には彼れは皆から輕視貌視されて、書記官長の職務すら滿足に行ふを得ざるに至る事は火を睹るよりも明らかなのである。大丈夫、よろしく大死一番して、大活す可しである。

（二〇）否認聲明は英國の新聞にも見縊られる

日本政府の弱腰は已でに親英派を通じて、外國にも判つてゐるので、彼等も此の聲明には高を括つてゐる。即ち『讀賣新聞』所載ロンドン十九日發同盟のロイテル報道に曰く、英國の各方面では近衛首相の談話の批評に於いて、

『「國民政府を對手とせず」との聲明に關し十八日風見書記官長は「右は將政權に對する否認乃至宣戰布告よりも强硬なる帝國政府の斷乎たる決意を明示するものである。」と發表したが、これは宣戰布告ほど强硬な手段ではないと見られてゐる』

と傳へてゐる。どうしても、そう見縊られる樣に出來てゐる。それは彼れ等が日本の一部政府要人や、外務省の弱腰を知り過ぎる程知つてゐるからである。

だが彼れ等は同時に此の弱腰政府をして、かくの如き補足以上の訂正聲明を發せしめた絶大なる力と全國民の大意志とを無視するならば、大なる幻滅を見るであらう。

と云つて吾れ等は、そう云ふ强硬な大勢力があるからとて安心しては不可である。彼れ等英支をして、眞に日本を恐れしむる樣な本當の聲明を發せしむるが好い。それには如何にす可きか？

（二一）舊中華民國は否定せられたり矣

即ち强硬派は內閣から十八日の聲明を引張り出した序に、更に一歩を進めて、次の問題に關する大聲明を內閣にさせる必要がある。そうすれば日本の本當の覺悟が英國や支那に判るだらう。

此の十八日聲明は極めて重大なものとして、左の語句を含んでゐる。即ち

『將政權は支那の國家國民より離脫した』

と云ふのである。之れはもう少し技術的に醇化して表現すれば、

『國民政府は舊中華民國と其の國民より離脫した』

と云はんとするにあつたと見える。然らば、之れを云ひ代へれば

『舊中華民國は主權政府を失へり』

と云ふ聲明になるのである。玆で更に一歩を進めて、

『舊中華民國は崩壞せり』

と云ふ事にもなる。つまり十八日の聲明の中には舊中華民國の崩壞の認識が含まれてゐる。然も夫れに止まらず、『粉碎撃滅』の思想も聲明してある處を見れば、

『十八日の聲明は國府否定に止まらず。論理的には舊中華民國の否定聲明なり』

と論推する事も出來るのである。同時に北支の新中華民國は未だ承認されない處を見れば

『現在支那は無國家狀態となつてゐる』

と云ふ文句も含まれてゐるわけである。之れが十八日聲明の尤も重大なる點である。

然らば『九ケ國條約』は當然滅失したと見なす可きである。何となれば『九ケ國條約』なるものは中華民國が國家として存在せる場合を要想として結ばれた條約で、苟も中華民國が存在しないならば『九ケ國條約』は自然現象として空文に歸して了ふのである。

之れ丈けの事は三段論法的に確實なので、誠に不用意に現內閣が發した聲明から吾々は之れ丈けの推論を獲得するのであるが、願はくば朝野同憂の士は之れを言質にして、此の推論の趣意をもう一度現內閣から聲明させる樣に努力して欲しいのである。或は議會に於ける質問でもよろしい。現內閣をして之れ丈けの事を大膽に聲明させて欲しいのである。

之れ丈けの事は十八日の聲明から論理的に結論出來るのであるが、然し、此の聲明から之れ丈けの推論的手續きをしなくては生れ得ないのである。即ち卵の中には一疋の鷄が生きてゐるが、夫れは生まして見ない事には第三者への妥當性はないのである。卵子は結局鷄ではないからである。

乃で、吾れ〳〵は此の十八日聲明の中から之れ丈けの結論を明白に政府をして聲明させない事には卵の中から鷄を證明した事にはならぬ。願はくば、**朝野同憂の士は此の弱腰政府を鞭撻して、此の舊中華民國否定聲明、『九ケ國條約』滅亡聲明を現內閣をして行はしむる樣に努力して欲しい**のである。或は議會に於ける質問でもよろしい。兎に角現內閣をして、之れ丈けの事をハッキリ聲明させて欲しいのである。

それでないと、折角の十八日聲明は又十六日聲明に逆戻りする危險があるのである。又親英派はそうし度くてならぬのである。それは彼れ等が、爾後、此の聲明に觸れる度毎に、之れを『對手にせず聲明』と號して、決して、『否認聲明』とは云はぬのでも判るのである。新聞記者は夢中で云つてゐるかも知れぬが、一部のものは意識的に云つてゐるのである。その結果として、民衆の頭の中には『否認聲明』は影が薄れて、『對手にせず』聲明のみが强く頭に殘つてゐる樣な結果になつてゐる。心細い事限りがない。

付記

本稿は先般『時局と人物』三月號に發表したもので、親英派を排斥する必要上、少しを挿入して再發表するものである。

再記

此の五月、某新聞記者が、外務省の某局長に、

『十六日の對手にせずと十八日の否認以上とは孰れを御前會議の眞相と認む可きや』

と質問したら、

『十六日の聲明が御前會議の眞相である』

と云つてゐる。之れは餘りに無責任なる胡麻化しで、それなら內閣は十八日の聲明に於いて御前會議の結果を歪曲した結果となつてそれこそ內閣の辭職問題を惹起するであらう。兎に角、外務當局が十六日の消極聲明を愛してゐる樣が好く判る。だが、非常時局の進展と共に彼れ等はその偏辯に對して高い價を拂ふ可く、余儀なくされるであらう。

「外務省改革論」
定價 金二十錢

昭和十三年五月廿八日印刷
昭和十三年五月卅一日發行

不許複製

著者 古谷榮一 東京市芝區新橋三の十六駒場ビル
發行者 森健夫 東京市芝區新橋三ノ二〇
印刷所 更生社

發行所 東京市芝區新橋三の十六駒場ビル
時局評論社
振替東京二八八七六番
電話芝(43)三八三三・六七七番

ニュース讀物

時局ニュースの速射砲!!

新聞に現はれなかつたニュースが滿載してある、重大事件は迅速かつ正確に解說してある、しかもニュース小說・社會小說等々の興味深いよみものも載せてある！　われらの「ニュース」はかうした特色ある雜誌だ！　有益で、面白くて、輕快で、スマートな雜誌だ！

本誌は多方面に亘るニュースを收載するために新聞記者聯盟を動員するとともに、全國愛讀者の投稿を歡迎する。愛讀をたまへ。

ニュースと讀物滿載

全國驛賣店：有名書店にあり。

毎月一日　十五日發行　〔定價十五錢〕

送料三錢

時局評論社

東京市芝區新橋三ノ十六（駒場ビル）

電話　芝(43)三八三三番　〇六七七番

振替東京二八八七六番

55
19